



ともに生きる

りゅうこくブックス
136

龍谷大学宗教部

ともに生きる

龍谷大学「建学の精神」

龍谷大学の「建学の精神」は「浄土真宗の精神」です。

浄土真宗の精神とは、生きとし生けるもの全てを、迷いから悟りへ転換させたいという阿弥陀仏の誓願に他なりません。

迷いとは、自己中心的な見方によって、真実を知らずに自ら苦しみをつくり出しているあり方です。悟りとは自己中心性を離れ、ありのままのすがたをありのままに見ることのできる真実の安らぎのあり方です。

阿弥陀仏の願いに照らされ、自らの自己中心性が顕わにされることにおいて、初めて自己の思想・観点・価値観等を絶対視する硬直した視点から解放され、広く柔らかな視野を獲得することができるのです。

本学は、阿弥陀仏の願いに生かされ、真実の道を歩まれた親鸞聖人の生き方に学び、「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」ことのできる人間を育成します。このことを実現できる心として以下5項目にまとめています。これらはみな、建学の精神あってこそその心であり、生き方です。

すべてのいのちを大切にする「平等」の心

真実を求め真実に生きる「自立」の心

常にわが身をかえりみる「内省」の心

生かされていることへの「感謝」の心

人類の対話と共存を願う「平和」の心

目次

「限りない愚かさ」	武田 晋	5
「これからの世界」を生きる皆さんが 持続社会とダイバーシティにどう取り組むか	ウスビ・サコ	31
人間は一本の管、だが苦悩する管である	杉岡 孝紀	63
「ともに生きる」ということ	内手 弘太	79
多様性と多声性…「ともにいる」ことを考える	山田 容	101
仰げば尊し	井上 見淳	131

龍谷大学宗教部は、大学内外からお招きした講師の講話・講演を活字化し、「建学の精神」を普及し体現するために『りゅうこくブックス』を刊行しております。

宗教部主催の法要・講演会には以下のようなものがあります。

- ・ 授業期間中 毎月十五日 深草学舎 顕真館にて お逮夜法要
- ・ 授業期間中 毎月十六日 大宮学舎 本館にて ご命日法要
- ・ 授業期間中 毎月二十一日 瀬田学舎 樹心館にて ご生誕法要
- ・ 毎期一回水曜日 顕真アワー
- ・ 五月二十一日 降誕会
- ・ 十月十八日 報恩講
- ・ 公開講演会 など

ブックスを講読していただくとともに、可能であれば各会場にもおまいりくださいませ。

(二〇二二年十二月十六日 ご命日法要)

「限らない愚かさ」

武田 晋

(本学文学部 教授)



武田 晋 (たけだ すすむ)

1965年生まれ、山口県出身。

'87年 龍谷大学文学部仏教学科真宗学専攻卒業。

'92年 同大学院文学研究科博士後期課程真宗学専攻単位取得満期退学。

'92年 龍谷大学非常勤講師（～'98年）

'95年 本願寺派宗学院研究員（～'98年）

'98年 龍谷大学文学部講師（特任／～'04年）、'04年 同准教授を経て、

'10年 教授（特任）に就任。

'02年 木辺御門主奨学賞（真宗連合学会）受賞。

山口教区萩組光山寺住職・本願寺派司教。

【著作】

『教行信証に問う』（共著／永田文昌堂 '01年）

『連研 学習ノート』（共著／本願寺派山口教区 '02年）

『山口（周防・長門）学僧略伝』（共著／山口真宗教会 '10年）

『選択本願念仏集講読』（安居講本、永田文昌堂 '13年）

『月々のことば』（共著／本願寺出版社 '17年）

『《人気の仏様たち徹底ガイド》阿弥陀・薬師・観音・不動』

（共著／大法輪閣 '19年）

『まるごと仏教ライフ ～浄土真宗のすすめ～』（本願寺出版社 '20年）

『「一念多念文意」に表現されたる往生思想』（『真宗学』97・98合併号 '98年）

『親鸞聖人における『往生論註』受容の視点』（『真宗研究』第46輯 '02年）

『共生思想と仏教環境保全へ～真宗の一視座より～』

（法蔵館『共生する世界～仏教と環境～』'07年）

『親鸞の妻、玉日をめぐって（一）』（『龍谷大学論集』497号 '22年）

ほか論文・記事など多数。

「一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし、虚仮諂偽にして真実の心なし」と。

〔顕浄土真実教行証文類〕「信巻」／『浄土真宗聖典―註釈版―』二二二頁

こんにちは。十二月最後のご命日法要のご縁を頂戴いたしましたので、少しお話をさせていた
だこうと思います。

大晦日が近づいてまいりました。梵鐘のあるお寺さんでは、大晦日には除夜の鐘を撞いて、今年一年の煩惱を払うなどということをお願いします。煩惱の代表的なものには三毒の煩惱、すなわち、貪欲・瞋恚・愚痴があります。貪りの心・怒りの心・愚かさのことです。私などは煩惱を打ち尽くそうとしてもキリがありませんから、百八回鐘を打つだけではとても足りないなと思います。しかし、浄土真宗という仏教では、煩惱を自ら打ち払って、あるいは打ち捨てて悟りを得るということは申しません。梵鐘の「梵」という言葉には「清浄」という意味がありますように、仏さまのお悟りのお声を聞くように鐘の音を頂戴していくことが大事なことはないかと思えます。

存在的な罪惡表現

浄土真宗の教えは、自ら修行して賢くなるというものでは決してありません。お配りしたレジュームの最初に、親鸞聖人の御消息（お手紙）を載せておりますのでご覧ください。

故法然聖人は、「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひしことを、たしかにうけたまはり候ひし

（『親鸞聖人御消息』／『浄土真宗聖典―註釈版―』七七二頁）

法然聖人は「浄土宗の人は愚者になる」あるいは「愚痴かえに還かえつて往生する」と仰っています。浄土宗では、これを「還愚げんぐの思想」と申します。愚かなものに還かえる。自らを見つめていくということですから。

法然聖人が自らの愚かさを吐露されるといふ根本には、やはり、偏ひとへに一師に依ると仰がれた善導大師のお言葉があります。

一つには、決定して深く、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して、出離の縁あることなしと信ず。

〔教行信証〕「信卷」／『浄土真宗聖典―註釈版―』二一八頁

罪業を積み重ねて、流転輪廻を繰り返してきた凡夫であるというこの言葉に、私は非常に惹かれます。親鸞聖人もそのところを自らの言葉で記しておられます。

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし、虚仮諂偽にして真実の心なし。ここをもつて如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、一念一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。如来、清浄の真心をもつて、円融無礙不可思議不可称不可説の至徳を成就したまへり。如来の至心をもつて、諸有の一切煩惱悪業邪智の群生海に回施したまへり。すなはちこれ利他の真心を彰す。

〔教行信証〕「信卷」／『浄土真宗聖典―註釈版―』二二二頁

今日今時に至るまで、清浄の心などあろうはずがない、嘘偽りばかりである。そのような私をかねて見抜いていた阿弥陀如来は、清浄真実なる心を持って我々を救わんがために至徳を成就されたのです。至徳というのは、具体的には南無阿弥陀仏の名号（お念仏）を成就されて、私の所にお届けになっておられるということです。

「凡夫」とは

凡夫という言葉は「愚かな人」「凡庸な人」を意味しています。聖者に対しての凡夫は、仏教の道理を理解していない者という意味です。

しかし、元々の原語である *prithag-jana*（プリタック・ジャナ）は「異なつて生まれたもの」あるいは「ひとり別に生まれたもの」という意味で、決して愚かなものというニュアンスはございません。それを、玄奘（六〇二―六六四）は「異生」と漢訳し、未だに四諦の道理を理解していない凡庸浅識の者としました。これが、後に「一般の人」「愚かな人」を意味する語となり、さらに複数形に用いられて、「下層階級の人びと」「愚かな一般のひとびと」という意味をもつように

なつたのです。

このように、「一般的な人間」を表す「凡夫」という語が、人間の存在性の内面的な自覚内容としての意味で理解されるようになったのは、中国から日本にいたる大乘仏教、なかでも浄土教思想のなかにおいてのことです。

親鸞聖人の「凡夫」理解

では、親鸞聖人は凡夫という言葉をどのように理解されていたのでしょうか。『一念多念文意』には次のように記されています。

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとへにあらはれたり。

〔一念多念文意〕／『浄土真宗聖典―註釈版―』六九三頁

煩惱を抱えた凡夫は臨終の瞬間まで、「私はどうなるのであろうか」とか「家族を置いて亡くなっ
ていかねばならない」とか、自分の欲望に捉われたことばかりを考え、その捉れを消すことがで
きない存在だと仰られています。また、曇鸞大師の『往生論註』を引用されて、

一つには有漏の心より生じて法性に順ぜず。いはゆる凡夫、人天の諸善、人天の果報、もし
は因、もしは果、みなこれ顛倒す、みなこれ虚偽なり。

（『教行信証』「行巻」『論註』引文／『浄土真宗聖典—註釈版—』一五八頁）

とも仰られています。人間や天人のような凡夫の有漏心からなる諸善や果報は、そもそもが顛倒
しており、虚偽であって、煩惱に基づいた行為であるから、いくら悟りを得よう、迷いを離れよ
うとしても、これはひっくり返っておりまよ、と仰られるのです。

また、龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』を引用されて、凡夫の所行では「智行いまだ満たず」、決
して涅槃の悟りに至ることはできないと見ておられます。

世間道をすなはちこれ凡夫所行の道と名づく。転じて休息と名づく。凡夫道は究竟して涅槃に至ることあたはず、つねに生死に往来す。これを凡夫道と名づく。

〔『教行信証』「行巻」〕「十住毘婆沙論」引文／『浄土真宗聖典―註釈版―』一四七頁

だからこそ、どのような行を行しても生死を離れることができない私たちを哀れんで、阿弥陀さまは本願を起こしてくださいだったので。

私のための本願

『歎異抄』には、

いづれの行にても生死をはなることあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。

〔『歎異抄』第三条／『浄土真宗聖典―註釈版―』八三四頁〕

とあります。「他力をたのみたてまつる」とは、決して阿弥陀さまに救ってくださいとお願ひするではありません。阿弥陀さまの救いが先手でありまして、その阿弥陀さまの救いにお任せをする、ということでもあります。

誓願の不思議によりて、やすくたもち、となへやすき名号を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものをむかへとらんと御約束あることなれば、まづ弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまゐらせて、生死を出づべしと信じて、念仏の申さるるも如来の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからはからひまじはらざるがゆゑに、本願に相應して、実報土に往生するなり。

〔歎異抄〕第十一章／『浄土真宗聖典—註釈版—』八三八頁〕

その阿弥陀さまのお心、不思議の誓願が名号として届いており、我々はその眞実の名号のいわれを聞き開いていくのです。

それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまへるところにあらざるることあることなし。因淨なるがゆゑに、果また淨なり、知るべしとなり。

〔教行信証〕「証卷」／『浄土真宗聖典―註釈版―』三一二頁

このように、浄土真宗の教・行・信・証というのは全て仏さまからご用意されたものでありますよ、ということをお親鸞聖人は仰られています。

月かげの歌

月かげの いたらぬ里は なけれども ながむる人の ころにぞすむ

こちらは法然聖人が詠まれたと伝わる歌です。一切の衆生を救うという仏さま(月)だけでも、その仏さまのお心(月かげ＝月の光)をちゃんといただくことが大切なのです。月の存在に気付か

ない人は、なかなか自分の罪業性を深く見つめていくことができません。月の光に照らされてこそ、私の影（煩惱）を深く見つめることができるのではないかと思います。

この歌についての梯實圓和上の解説を紹介いたします。

さわやかな秋の月は、その光をすべての人に分けへだてなく注いでいるが、光を背にしている者は、光の中にながら光に遇うことができなればかりか、わが身の黒い影におびえるばかりである。しかし影を背にして月を仰ぐ人は、影を持ったままで月の光を全身にあびて、心の底まで、澄みわたっていく。大悲智慧の光明は、万人を平等に照らしているが、その教えを疑いなく聞き受けて、われもまた光の内にありと念仏する者のみが、光に包まれた人生を送ることができるというのである。

（梯實圓『精読・仏教の言葉 親鸞』一九九九年／大法輪閣 四九頁）

梯和上は数年前にご往生されました、大阪の津村別院でお葬儀が執り行われました。私はお通夜にお参りさせていただきましたが、お通夜の最後に息子さんの梯信暁先生が晩年の和上のお話

をされました。

和上が病床でベッドに横たわられていた時、奥さまが「お父さん、一緒に色んなところに連れてつってもらったね。本当に楽しかったよ」とお声をかけられたというんですね。そうしますと、梯和上は「今もなあ」とお返事をされたのだそうです。「今もなあ」っていうのは、「今あなたとまだ一緒に居るのが楽しい」という意味かも知れないけれど、それだけではないだろうと私は受け止めました。このような身になってしまったけれども、阿弥陀さまと共に今ここに、喜びの中に居るのだと、仏さまと一緒に居ることを「今もなあ」と味わわれた。私はそれを聞いて「ああ、和上らしいな」と思いました。果たして、私たちは苦悩の中にある時に「今もなあ」と頷いていけるように教えをいただいているだろうか、と深く考えさせられました。

現実の社会生活を起点として

ところで親鸞聖人の教えを見ますと、非常に学問的と言いますか学問的と言いますか、日常の中のこと、例えば「弟子とこういう出来事がありましたよ」ということは、ほとんど出てまいり

ません。しかし、『歎異抄』ではその行実が僅かに窺えます。

『歎異抄』を研究されている矢田了章先生は、

『歎異抄』で顕著に見られる現実の具体的行為を取り上げそれを起点として論が展開していることは、親鸞自身の直接的な教学表現にあまりみられないことであり、親鸞の言葉としては特徴的なことである。(中略) 現実の社会生活における善悪の行為を問題の起点として、現実の行為に惑わされることなく阿弥陀仏の世界に帰入させようとすることにあつた。

(矢田了章『歎異抄』の教学史的立場／矢田了章編『歎異抄に問う―その思想と展開―』所収、十八～十九頁)

と親鸞聖人の態度をまとめられています。しかしながら、我々が生きているのはこの現実の世界であります。そこで、現実の世界の中の我々の欲望の愚かさを表しているお話を少し紹介させていただきます。ただこうと思います。

落語「花筏」はないかだ

落語の中には色々といふ教的な要素があります。今回紹介するのは「花筏」というお相撲さんの話です。実際に花筏というお相撲さんが実在したようではありますが、ここでの設定は当時最高位であった大関花筏ということになっております。

今はお相撲さんの本場所とは六場所ですが、その頃は上方の大相撲と江戸の大相撲の二場所しかありませんでした。日数としても、今は十五日間ですが、当時は十日間でした。十日間だと差がつかず、勝負が同点の力士が多くなってしまうということで、段々と日数が伸びていったんですね。お相撲さんは「一年を二十日で暮らす色男」などと言われていたんです。

ですが、一年間二十日だけ相撲を取って、他は遊んでいるのかと言うと、そんな訳ではありません。当然稽古をしたり、タニマチ（谷町）というスポンサーが居ますから、そういったところに呼ばれて地方巡業に出ていくんです。

この花筏が属している部屋が、兵庫県の高砂の地方巡業に呼ばれました。ところが、稽古中に花筏が大怪我をしまして取り組みができるような状態ではなくなりました。そこで困っ

たのは親方です。

親方はどうしたかというところ、代役を立てようとしたんですね。今はテレビ中継があつて全国に顔が知られていますから、代役なんてとても無理ですけれども、当時はそれが叶いました。

そこで、代役として目をつけたのが、提灯屋の徳さんという人です。徳さんは顔が花筏にそっくりで、体も大きく大飯ぐらい。所謂いわゆる太つていらつしゃつたということです。そこで、親方は徳さんにお願ひに行くんです。

徳さんは「今まで相撲など取つたこともないし、代役なんて無理ですよ」と断るんですけども、親方が「徳さん、一日いくら日当をもらつている？」と聞きますと、徳さんは「一分もらつてる」と答えます。「ならば二分払おうじゃないか。往復の手当も出すから是非一緒に来てくれ」「いや、でも私、相撲取れませんよ」と言いますと親方が「大関は怪我をしましたので取り組みはしません、土俵入りだけはいたします。と言えば、皆も顔が見れて安心するじゃないか。後は徳さんも飲み食い自由だから」と説得をします。結局、徳さんも欲に駆られて、この地方巡業に同行していくことにするんです。

当時はプロのお相撲さんだけが相撲を取るわけではありませんでした。地方の力自慢と言われ

る方々も、プロのお相撲さんと一緒に対戦して取り組みをするということになっていました。

そこに出てまいりますのが、網元の息子で、素人力士であります千鳥ヶ浜という人で、非常に剛腕な人です。千鳥ヶ浜、プロのお相撲さんと相撲を取りましてなんと連戦連勝、千秋楽まで全勝してしまいました。そこで地元のスポンサーが、最後は大関に土俵入りだけじゃなく是非出てきて取り組みをしてほしいと言います。

そこで親方が徳さんを説得に行きます。「徳さん、何とか最終日だけでも取り組みをしてほしい」「いや、それは約束が違うじゃないですか」と徳さんはすぐに帰ろうとするんですが「いやいや、ちょっと待ちなさい。あなた聞きますと一日酒を三升、飯を五升くらって、噂によると女中さんにまで手をつけているというじゃないか。そこまで元気なら取り組みだつて出来るんじゃないか」と言われまして、さすがに徳さんも折れてしまいます。「まあ、しょうがない。ならば土俵には上がりますが、どうしたらよろしいでしょうか」と言いますと、親方が言うには「まず、軍配が返つたらすぐに両手でポンと相手を押しなさい。そして後ろ向きにでんぐり返りをしなさい。ならば、大関も怪我をしてすぐに負けてしまった、地方の力自慢もやっぱり強かった、と皆が納得するだろう」ということで徳さんを説得するんです。徳さんも、「まあ、それな

らば出ましよう」ということで、すぐに後ろ向きのでんぐり返りの稽古を始めるんですが、親方は「そんなことしなくていいから早く寝ろ」と言うんですね。

でも、もう一つ困ったことが起こりました。千鳥ヶ浜が自分の父親に「明日は大関と取り組みができる」と自慢してしまうんです。そうすると、父親は「明日は土俵に上がっちゃいかん」と説得します。「プロのお相撲さんは今までわざと負けてきたんじゃないか。最後の日に大関が出てくるといふのは、お前を半殺しにして帰ろうという魂胆に違いない。もし、大怪我をしたら明日から誰が漁に出るんだい」という風に、息子を説得するんです。だけど取り組みしたくてたまらないこの息子さんは「ならば見るだけならいいでしょうか」ということで千秋楽の取組を見に行くんです。

さて、千秋楽結びの一番、大関花筏と千鳥ヶ浜が呼び出されますが、千鳥ヶ浜は土俵に上がらずに下で眺めておりました。しかし、周りの人が急かします。ついついマワシを付けられて土俵の上が上がってしまう。これを見ていた徳さんはびっくりするわけです。ものすごい体付きで剛腕な雰囲気を漂わして、しかも顔つきが恐ろしい。「こんなところに来るんじゃないやなかつたなあ」と、徳さんは塩を取ります。塩を撒き仕切り線まで出てくださいということ仕切り線まで歩み寄っ

ていきますが、徳さんはここにきて後悔を始めてしまいます。「やはりこんなところに、欲に駆られて来るんじゃないかなかった……」と、徳さん仕切り線で思わず「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えたっていいんですね。

その南無阿弥陀仏のお念仏を聞いた相手の千鳥ヶ浜は、「大関が南無阿弥陀仏と言っているのは、きつと私を半殺しにして帰ろうというつもりに違いない。親の言うことを守っておけば良かった」と、思わずこの千鳥ヶ浜も「南無阿弥陀仏」とお念仏を申したんです。

二人が「南無阿弥陀仏」と仕切り線できりに念仏申しますから、なかなか取り組みが始まりません。終いには行司が軍配を返しまして「取り組みはじめ！」と申します。徳さんは言われた通りに千鳥ヶ浜をポンと手で突いて、後ろにでんぐり返ろうと思いましたが、何と千鳥ヶ浜がそのまま転がって負けてしまった。自分が勝つ予定じゃなかったのに勝ってしまったと、徳さんの方がビックリしてしまいました。ところが周りの人は「さすがは大関だ。怪我をしても一突きであの力自慢を倒してしまっただけは上手かったというオチであります。徳さんの本職は提灯屋でありますから、張る（貼る）のだけは上手かったというオチであります。

今のお話は、浄土宗的なお説教が元になっているのではないかと思えます。欲に駆られてやって来て、助けてくださいの南無阿弥陀仏、親の言うことを裏切って、助けてくださいの南無阿弥陀仏です。これを浄土真宗で味わいますと、欲に駆られて、親を裏切って、そういった立ち位置に「いつも」私たちは居るということになるのではないかと思います。そんなお前を救うぞという意味での南無阿弥陀仏と受け止めていかなければ浄土真宗のお説教には成りません。つまり、私たちは常に愚かさの中に居るということです。

中島みゆきへのハガキ

実は、今日の講題であります「限りない愚かさ」というのは、中島みゆきさんの「慕情」という歌の歌詞から取っています。「やすらぎの郷」というドラマの主題歌であったものです。

中島みゆきさんのお祖父さんの中島武市という方は北海道十勝の開拓に非常に尽力した方で、帯広市の市議会議員をされていました。本願寺の帯広別院にはこの中島武市の胸像が立っております。ちなみに、龍谷大学名誉教授の家郷隆文先生は、中島みゆきさんが藤女子大学時代の恩師

でもありました。

私たちの世代で中島みゆきさんと言うと、思い出しますのがニッポン放送のラジオ番組です。私が学生の頃、オールナイトニッポンという番組で月曜深夜に八年間担当されていました。

このオールナイトニッポンの最後で、中島みゆきさんがいつもお別れのハガキを一枚読まれます。これが非常に印象的で、私たちの琴線に触れるようなものが多いのです。

紹介しますと、一九八三年にはこんなハガキが読まれました。

みゆきさん、少しだけ私の愚痴を聞いてください。私は高校二年の女の子です。父、姉、兄、おばあちゃん、おじいちゃん、私の六人家族です。母は私が二歳の頃、癌で他界しました。二十四歳の姉は、今年の十一月にお嫁に行きます。今まで姉が家のことをやってきてくれました。これからは、私がやらなくてはいいけません。でも、私は短大へ行きたいんです。だけど、だれが見たって行ける状態ではありません。

中学三年の時は、なりたい職業のために、普通高校に入りました。でも、今はどうしていいかわかりません。

最近になって、姉がいなくなることに心がつまみつけられる思いがします。

父が最近言ったことは、「これからは父ちゃんが飯を炊くからな」ということでした。こんな父を残して大学へ行けますか？ でも、私の夢は？ どうして、母ちゃん死んじゃったんだろうな どうしてかな？

というハガキでした。みゆきさんはこのハガキに対して、

この人は優しい人なんだなと思います。本当だったら、お姉さんさえお嫁に行かなければ、自分が大学に行けるのにと恨んじたいところなのにね。そういう恨み節は書いてないんだもんね。家の人たちのことなんて面倒見ないって言っちゃえば、それでいいのにな。見ようと思ってるんだもんね。だから、優しい娘なんだなと思います。やっぱり、こういう優しい人が、成りたい人に成れないことって、やっぱりあるんだよね。

でもね、ションボリしちゃわないで、もう一回考えてみてください。大学に行って、何しなかったんだらう？ なりたい職業について、何をやりたかったんだらう？ そして、また

その先で何をやりたかったんだろう？ その先の先まで、もう一回考えてみませんか？ そうしたら、遠い回り道をして、そこに行ける道はありませんか？ がんばってください。

と優しくコメントされています。もう一つ、ゆうさんという人のハガキを紹介いたします。

みゆきさん元気ですか。

昨日、俺、駅のホームで下りの電車を待っていたら、側のベンチに座っている女の子が目に入っただんです。多分高校生らしいその女の子はしきりにタバコを吸いながら人目を気にせず泣いていた。その子は定期入れか何かにみゆきの切り抜きの写真をしっかり握っていたんだよ。いまにも声を上げて泣きそうなその子の無言の涙がなんだか忘れられない。ホームに電車が入ってきてても乗ろうとしないでまた新しいタバコに火をつけ出す。

思わず俺はその電車に乗らずに見送ってしまった。十五分くらい後にまた次の電車が来た。俺は乗った。その子はまだ座って泣いている。

通りすぎる人々の目は呆れたような冷たい目でその子を見る。そりゃ泣いてるのなんて誰

が見ても目障りで迷惑かもしれない。でも俺はそんなことじゃないと思ったんだ。みゆきに言ってもどうしようもないことだけど。みゆき、その子はきつと会ったこともない喋ったこともない遠い存在のあなたの写真に涙を流していた。それを支えに生きているんだと感じたんだ。どんなにその子が泣いても叫んでも気づきっこないのに。寂しいやつだと思ったよ。

みゆきさんはこの時に、彼にお札を言っていました。「このハガキを頂かなかったらホームで泣いていたその子の存在を私は知らなかった。教えてくれてありがとう、その子が立ち直つていきますように」とコメントされています。

もう一つ最後に紹介して終わりにします。

みゆきさんくんばんは。僕の学校の校長先生のことを書きます。

昨日の日付けで僕の学校の校長先生が定年退職しました。仕方ないとは言え何かこの僕の中学生活三年間にして大きな穴がぼっかり空いたような気持ちです。

僕がこの中学校に入学した日に転任してきた校長先生は、運動会の日に分が小学生の頃

に考えた体操というのをやってくれました。またこの学校に不良がいるんだと他校の先生から言われて、殴られてまでして校長室でお茶を勧めて一対一で話したり、不良と呼ばれた人が校内でたばこを吸っているとPTAのお母さん方に言われた時など、一週間以上もその子のあとを帚とごみ箱を持って歩きました。

また車椅子で通学する生徒が入学した今年の春など、他の先生の反対を押し切って門の階段の横に自費で坂を作りました。校内の電話を一人で電話ができるように車椅子でも届くところまで電話を下ろしてくれたり、学校の生徒のことに一生懸命だった校長先生なんです。

僕はそんな校長先生が大好きでした。

多分僕の学校の生徒全員、校長先生のことを好んでいたと思います。

そんな校長先生が昨日僕らに最後の挨拶をして去っていきました。涙をこらえきれませんでした。

皆、色んな悲しみの中にあったり、あるいは嬉し涙を流したりして生きています。私たちの仏教の上では、「私たちは、悲しさや嬉しさを見放さない仏さまが常にいらっしやるといふ喜びの

中にある」ということを忘れないようにしなければいけないと思います。

梅原真隆先生という方がこんな歌を詠まれています。

ほほえみに　かがやくいのち　なみだにも　くもらぬいのち　たたえまつらん（専長寺境内）

苦しみや悲しみはあるかもしれないけど、決してあなたを見捨てることのない阿弥陀さまがここにいるよ。その阿弥陀さまは、あなたをいつも照らし輝かしているんだよということを「たたえまつらん」と詠われた歌であります。

年末が近づいてまいりました。これからまた寒くなると思いますが、いつも変わらぬ灯火を心に保ち続けつつ、生活を送っていくとこの大事さを教えてくれているように思います。とりとめのない話をしましたが、この私のためにはたらいてくださる阿弥陀さまのご恩を是非ご聴聞して頂戴していただけたらと思います。

(二〇二二年五月二十一日 創立記念降誕会)

「**これからの世界**」を生きる皆さんが
持続社会とダイバーシティにどう取り組むか

ウスビ・サコ

(京都精華大学前学長)



講演後に入澤崇学長（左）と顕真館前にて撮影

ウスビ・サコ (Oussouby SACKO)

マリ共和国生まれ。
京都精華大学 前学長
／全学研究機構長
／人間環境デザインプログラム教授

国費留学生として北京語言大学，南京東南大学で学ぶ。
'91年来日，'99年京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了。
博士（工学）。専門は空間人類学。京都精華大学人文学部教員，学部長，
学長を経て現職。
2025年日本国際博覧会協会 副会長・理事・シニアアドバイザー兼任他。

【著作】

『「これからの世界」を生きる君に伝えたいこと』（大和書房）
『アフリカ出身 サコ学長、日本を語る』（朝日新聞出版）

など。

皆さんこんにちは。そして、おめでとうございます。今日、この記念すべき素晴らしい場に招きいただき本当にありがとうございます。光栄でございます。

今日は、これからの世界を生きる皆さんが、どうやって共生社会、あるいはダイバーシティを持続的に重んじる社会を作っていくのかということについてお話しいたします。ダイバーシティについては自分自身の経験を中心に語るしかありませんので、それをベースに皆さんと少しでも情報共有できたらと思っております。

自己紹介 グローバル化の歩み…留学生の苦悩と可能性

実は、私は日本で過ごした年月が一番長いんです。マリで十九年間、その後中国で六年間、そして、日本は三十一年間です。時々、「自分のアイデンティティって何なんだろう?」と思うことがあります。そういうわけで、今日は外から見た日本ではなく、内側から見た日本についてどう考えるかということをキーワードとして考えていきたいと思えます。

まず、私自身が生まれ育った環境の話をしましょう。私は三人兄弟の長男です。三人兄弟とい

うのは日本の家族としては普通の人数かもしれませんが、マリでは恐ろしいほど少ないのです。私の一番近い友達には自慢としてではないですが、「自分は二十八人兄弟の十八番目だ」と言います。三人というのは物凄く少なく、何をやっても負けるみたいな感じですよ。

とは言え、うちの家には常に三十人近くの人が住んでいて、お父さんの田舎、その隣の田舎、お母さんが知り合った誰かの親戚なども居ました。私たちは首都であるバマコに住んでいましたので、みんなが「用事があるから」と言っただけで来て来るとは、一日滞在して、次の日「用事はどうなりましたか？」って聞いたなら「急いでません」と言うんですね。そのうち、その人は一ヶ月どころか一年間住んでしまう。だから常に「あなた誰やねん？」と思うような人が家に十五、二十人位は居ました。しかも、その「誰やねん？」と思うような人によく叱られて指導されるんです。そして、うちの親はそれについて何も言わないんです。そうやって、いろいろな人に指導されていきましたから子どもながらに「大人って人によっていろいろな意見を持つてんだな」と思いました。片や「ちゃんと勉強しろ」と言う大人が居て、片や「勉強なんて意味ない」って言う大人が居るんです。でも、子どもながらに自分でそれを受け入れて、自分の個性を作っていく。そういうところはマリの教育の中で重要なポイントだったなと思います。

私の学校生活 マリの高校卒業と国費留学へのプロセス

私はそうやって育って、高校卒業後に中国に渡りました。

簡単に経歴を説明しますと、中国には一九九一年まで滞在しまして、その後、京都大学の大学院工学研究科で博士号を取り、二〇〇一年に京都精華大学人文文学部の教員になりました。そこから教員をしながら大学作りに関心を持ちました。私にとっては自分自身が置かれた状況を日本の大学の中でどう見ていけば良いのか、ということも重要だったんじゃないかなと思います。ただ、そればかりを意識すると何もできないので、私は「自分はお客さんではない」ということを強調して、あくまでも「この大学を良くしていく一員である」という意識で大学に参画し、つい最近まで学長を勤めさせていただきました。この四月からは別の役職で大学に関わり続けております。

私の専門は多岐に渡ります。もともとは工学部ですが、工学をやりながら絶対的な近代化への批判というのをやりました。徐々に、われわれのエゴでこの社会を作ってはいけないと思うようになり、建築は社会的汎用性を持たなければいけないという姿勢で建築に関わってきたのです。

そういう意味で、私は自分の研究を空間人類学と呼んでいます。

私が生まれ育った社会と共生の概念

さて、私が生まれ育ったマリを少し紹介いたします。

マリはかつてガーナ王国、マリ帝国、ソンガイ帝国というところが存在した地域です。二〜三世紀から、ずっと多様な文化が存在した地域であると考えられています。

場所は西アフリカのちょうど真ん中の国で海には面していません。かつてはフランスの植民地でした。実はマリの公用語はフランス語なんです。二十三もの民族の三十以上の言語があるにも関わらず公用語がフランス語というのは、日本ではピンと来ないかもしれません。

私たちは学校ではフランス語しか喋ってはいけません。そして、家に帰ると逆にフランス語を喋ると怒られるということがあります。そうした言語の切り替えは、言語だけの問題だけではなくて話している時の話者の性格にも影響しています。フランス語で喋るときの自分の主張や意識と、自分たちの民族の言語を喋るときの自分の主張や意識というの実は違っているん

です。一日の中で違う人格を切り替えながら生活をしているような感じですか。私自身はマリの言葉で言うところのパンバラ語とマンデイカ語とソニンケ語が話せます。あとは、フランス語・英語・ロシア語（ほとんど忘れてる）・中国語・日本語が話せます。

マリの宗教事情としては、九十%がイスラム教で、次にキリスト教そして、その他の宗教です。ただ、先程話しましたフランス語にしても学校にしてもイスラム教にしても、マリにとっては輸入された文化です。マリがもともと持っていた宗教観は、アニミズムあるいは自然崇拜の宗教ですので、それを横に置きながら他の宗教と親和性を持つというようなことが多いのです。

多くの言語を話せると言いましたが、それは私にとっては「たまたま話せる言葉」ということです。マリでは他の民族の言葉を喋れるというのは自慢でも何でもなく、意思疎通ができるという事です。共存社会を作っていくための一つの条件なのです。共存するためには、相手と何か文脈的なところで通じ合えるということが凄く重要です。

実は、私が喋れる、あるいは勉強してきた言語の中で一番難しかったのは日本語なんです。まず、日本語の論理性がよく分かりませんでした。文法的にも、今まで私が喋り勉強してきた言葉

とは真逆なところがありました。さらに言えば、たとえ文法通りに勉強したとしても、それで喋れるかと言ったらそうでもない。日本語は文化がついてくる言葉なので文脈が非常に重要なんです。日本文化という文脈がわからないと、日本語はなかなか通じません。

だから、私自身は日本語を勉強する時に、まず身体化して日常的な体験からどうやって語学を学ぶのか、あるいは、本当に日本人の真似をしながら、時には失敗し、その後その答え合わせしていく、というところで日本語を学んできました。

こういった言語体験も多様性社会の中で重要なことだと思えます。言語がわかるかわからないということではなく、いかに自分が経験、体験して、自分を見つめ直していくかということが重要なのです。

グローバル化（地球規模化）

さて、今日のキーワードをいくつか説明をさせていただきます。

まず、グローバル化というのは、もともとは経済や政治などから始まった概念であると私は

思っています。私の視点で今現在のグローバル化についてまとめると、グローバル化することはヒト、モノ、カネ、そして情報が国境を越えて自由に行き来するようになるということです。そして、グローバル化すると、物事の価値を一つの国の判断では決められなくなります。

今の世界を見渡してみると、国と国の壁が低くなり、物事の価値を決めるにしても自分の国さえ良ければ良いということではなくなっています。

グローバル化と国際化の違い

非常に誤解しやすいことですが、国際化とグローバル化は混同されがちな概念です。

二〇世紀は国際化が進みました。一国と一国、あるいは、一国と複数の国の関係です。対して、グローバル化は二十一世紀の現象で、国単位ではなく、個人や特定の集団が国の概念を超えて関係し、存在するということです。モノの価値はそのネットワークで判断され、一国のルールや政策で決めることは難しくなります。そして、グローバル化においては、情報と技術発展が鍵になります。また、モノに価値が置かれるために、モノによって人の価値が判断されやすいという危

険性があります。

ダイバーシティ（多様性）

グローバル化において一番重要になってくるのがダイバーシティです。ダイバーシティは人種、性別、宗教、性的指向、社会的経済的背景および民族性の個人間の違いが存在し、これを認識するということです。しかし、この認識するというのが、われわれにとっては結構難しいのです。なぜなら、私たちは社会をパターン化する癖を持っているからです。

私はダイバーシティというのは「マイノリティを優遇するということだけではなく、マジョリティの意識を変えろということ」だと思っています。

日本社会について、よく「同調圧力の強い社会だ」と言われます。そのような社会では、自分がマジョリティに居ることによって苦しんでいるような人がたくさん居ます。自分がマジョリティに入っているということ自体が「逃げだ」と思う人が多いのではないのでしょうか。マジョリティの中で、自分の主張を言えない、みんなに合わせなきゃいけない、同じように行動しなきゃ

いけない、というような同調圧力を常に感じているということがあります。

ダイバーシティは、お互いの存在を認め合うことです。それぞれに、いろいろな違いがあると
いうこと。私は、マジヨリテイの意識を、そういう方向に変えていくことでダイバーシティと関
わってきました。

日本の留学とさまざまな社会との関わり

私が日本に留学したのは一九九一年です。その頃は一九八三年から始められた「留学生十万人
計画」の時代でした。政府は留学生を受け入れる文言として、「教育」「友好」「国際協力」とい
うことを言っていました。

実は、この頃の留学生が一番問題を感じていたのは大学ではなく日本社会の方でした。留学先
の大学内では、あるいは良かったかもしれませんが。しかし、留学生は大学の中で生活をするわけ
ではありません。留学生が日本社会で生活する中で、日本社会がどう留学生を受け入れていくの
か、留学生のことをどう見ていくのか、どう付き合っていくのか、ということが非常に重要です。

この計画は二〇〇〇年までに十万人受け入れを目指していましたが、達成は二〇〇三年です。

そして、つい最近（二〇二〇年）までは留学生三十万人計画（二〇一八年に達成）というのがありました。三十万人計画の方針には、非常に綺麗なことがいろいろと書いてありますが、この通りにはいかないわけです。私は、日本社会において、留学生あるいは外国人という存在が「何のために居るのか」ということについて、日本社会の側がもう一度考える必要があると思っております。

ワリカンとオナイという文化の謎

半分は笑い話ですが、私自身、日本では本当に些細なすれ違いがいっぱいありました。

例えば、同級生が「おない」という言葉を良く言うんですが、そもそもマリでは同じ年の人が同級生だと考えたことがありませんでした。マリには留年制度がありますから、小学一年生から留年するんです。二回留年して三回目で退学です。当時、小学校六年生では国の統一試験があつて、統一試験に合格しないと中学生にはなれません。そして、最後にはバカロレア（高等学校教育の修

了を認証する国家試験）があります。

だから、私の感覚としては、同級生は「一緒に勉強する人」であって、「同じ年齢の人」ではありません。日本のように「同じ年齢だからタメ口がきける」というような話ではないんです。

もう一つ、日本人は、とにかく、いかに人を振り分けるのかを考えているのだなと感じたことがあります。私が行動すると、「サコ、これA型っぽいんちゃうか?」「いや、B型ちゃうか?」みたいなことを言われるんです。なんでA型とかB型にしたがるのが良く分かりません。また、「サコの干支って丙午（ひのえうま）やん。やっぱり丙午やね」と言われたりもしました。マリでは、そんな考えはないんです。

日本のコミュニケーションの特徴として、自分と相手との間で、「同じこと」あるいは「何か通じ合うこと」をまず見つけて、それが見えた段階で序列関係を作っていくというのがあります。私からしますと、凄く面白いことだなと思います。

そして、私が一番腹立たしかったのは、お酒を一滴も飲まないのに食事に行くと「ワリカン」にされるんです。「何で私が皆の酒代を払わなきゃいけないの?」と思いつながら払ってきました。本当に何気ないことかもしれませんが、留学生には分からずに、困るのです。しかも、そういう

ことを教えてくれるオリエンテーションの場もありません。授業についてのオリエンテーションは十分にあると思いますが、日常生活について、あるいは日本では注意すべきこと、あるいは日本人と付き合う上では何が重要なかということ、そういうことは全く知らされません。

阪神大震災後の生活と社会活動

私は、自分自身がそういうことで苦しんだということもあって、阪神大震災の後に留学生のための居場所作りをしました。留学生同士が語り合い、さらに留学生が自らの問題意識を日本人に語っていくのです。日本人や留学生の学生ボランティアも六五〇人いました。オリエンテーションをしたり、日本語の先生を招いて留学生向けの講座をやったり、いろいろな交流をしました。鴨川沿いでワールドフェスティバルというのを開いたときにはテントなどの備品を龍谷大学からも貸していただきました。

「留学生」イコール「ずっとお客さん」ではなく、この社会の一員として、いろいろなことをしていきたいのです。当時としては珍しい活動でしたが、私は、留学生をどうにかして日本社会

に参画させたいと思っていました。日本が多様化していくために必要なことは、概念ではなく行動であると思ったのです。

異文化と接する日本人独特の課題 文化スキーマについて

異文化と接することについては日本人独特の問題があります。

文化スキーマと言いますが、人間は自分の体験したことを長期記憶に保存して、それが知識として組織化され、それに基づいた行動をしてしまうのです。テレビで見たものとかそういうものが自然と出てきてしまうんです。非常にステレオタイプ化しやすいものですから、危険なことがあります。

私が学部長をしていた時、食堂の壁に私が好むメニューの写真と似顔絵を貼りました。京都精華大学はマンガ学部が有名ですので、私の写真をマンガ学部の学生たちに渡して似顔絵を描いてもらったんですけども、返ってきた似顔絵は私が渡した写真とは別物だったんです。そもそも、私でもないんです。顔から何から何まで全部が違う。私ではなく、彼らが記憶している黒人俳優

だったりアメリカ人の誰かであったり、それを描いてしまったんですね。

また、私が京都でおばあさんに道を聞いた時にはこんなことがありました。私が日本語で、「どこそこはどこですか?」と聞いたんですが、彼女は、「英語わからへんねん!」と答えられました。「いや、日本語ですよ」と言っても「誰か英語わからへん?」って周りに助けを求められます。私が話していることは聞いていないんです。私を見た瞬間、「この人は英語しか喋れないんだ」と決めつけてしまって、私が何を喋っても彼女の中では全部英語に変換されてしまうんですね。

こういう文化スキーマというものについて、これからの社会では特に気を付けていかなんといけません。文化と文化の違いというのは仕方がないところもあるかもしれませんが、相手を知るとか相手とじっくりと交流することで、そういうものをなくしていくことができるんじゃないかなと私は思っています。

「外国人」という型

私が良く感じるのは、人はフレームを作りたがるということです。フレームを作るというのは、外国人に対してだけではなく日本人同士でもです。私たちは、お互いに認め合うよりも、パッケージ・フレーム化することで物事を管理しがちなのです。

例えば「中国人」というパッケージを作ってしまうことがありますが、実際に中国の留学生たちと喋ると本当に個々が全然違います。それをパッケージ化することはすごく危険なことです。「個」としてどう見ていくか、ということが多様性を重んじる社会の中では非常に重要なのです。

私自身についても、「私はアフリカのマリ出身です」と言うと言った瞬間に「嬉しい」と言う人がいます。私が「何が嬉しいの？」と聞くと、「動物が大好きです」と言うんですね。めちゃくちゃ悩ましいよね。どうしたら良いのかなと思います。

もう一つ。私はムスリムですから豚肉は食べられません。でも、日本に来たばかりの頃は、いつも研究室のメンバーと一緒にランチでとんかつ屋さんに行っていました。私はそこでフイレカ

つを頼んで、大体週二回くらいとんかつを食べていたんです。そして、夜になるととんかつラーメンを食べに行くんです。私は「とんつて書いてあるけど、ぶたつて書いてないから大丈夫だな」と思っていました。さらにラーメン屋さんでチャーシューという不思議な名前の肉があつて、それをダブルとかトリプルで頼んで食べていたんです。数カ月に渡つてたつぷり「とん」を食べてたんですよ。ある日、お弁当を頼む時、「とん」が豚のことだと初めて認識して、すごくショックを受けました。だから、日本社会にお願ひしたいですね。「とん」つて書くなら、カッコして（豚）つて書いてください。チャーシュー（豚）で良いんです。コミュニケーションで解決できることだと思ひます。

また当時、研究室で、「サコ、あの肌色のもの取つてきて」と言われたことがあります。言つた人には本当に悪気がないんです。でも、肌色と言われても、肌の色はそれぞれに違うのでわかりません。そもそも、マリでもフランスでも、肌色という言葉は使いません。日常の生活の中でコミュニケーションを取つて改善できる事はいっぱいあるんじゃないかと思ひます。

アイデンティティ重視の大切さ

文化人類学者のエドワード・ホールは「人間は文化というメディアを通してしか意味ある行為も相互作用もできない」と言っています。彼はプロクセミクス（近接学）をやっつけて、『隠れた次元』という本では「一番ハイコンテクストな文化は日本だ」と言っています。ハイコンテクストというのは、直接的な言葉ではなく文脈的なことや暗黙知を重視しながらコミュニケーションを取ることです。これを日本では「空気を読む」と言いますね。「空気を読む」ということは重要なかもしれませんが、本当に「読んでいる」のでしょうか。「逃げている」のではないだろうか、と考えることがあります。

学生たちと話をすると、意見を言わないのが美德だとか、物事を批判的に捉えないとか、あるいは、人に合わせればトラブルが少ないというように言います。でも、実はそうやって人に合わせることで、本人が苦しむということは良くあるのです。

ゼミ旅行で部屋割りした時も、同じ部屋の人たちがハイタッチして「今日はすごい語ろうね！」って言うんですね。それなのに、解散して二時間後くらいに戻ってくる人が絶対に居るん

です。「先生あの人と同じ部屋は嫌だ」と言うんですね。「えっ?! さっきハイタッチしてたじゃん!」と言うと、「空気を讀んだ」って言うんです。なんでその我慢が必要なんでしょうか。むしろ、今戻ってきたことがこちらにとつては迷惑なんですけどね。日本は、そういうことが非常に良く起こる社会です。

「これからの世界」で人間はどう生きるべきか

では、これからどういう風にすべきなのかということについて考えていきたいと思っています。

私は、日本に住みながら日本のことを勉強しようと思いました。日本の茶道、華道、仏教とかについてです。そうやって他者と出会うということは、自分を再発見するための機会なのです。自文化と他文化を混ぜるのではなく、交流することが大切です。私が日本にアシミレーション(同化)するということではありません。むしろ、日本社会の中でどうやって同化せずに、マリの文化、あるいは私の民族であるソニンケの文化を持ったまま生活し、自分の居場所を開拓するのかが、ということが重要なのです。

でも、日本では勉強すればするほど同化を求められます。日本社会は、違うものを交えて社会を作っていくのではなく、どんどん似た者同士にしようとしています。

私は共存社会の中で一番重要なのは、同化せず、それぞれが自分の特徴を持ったままに、どうやって社会を作っていくかということを考えることだと思っています。これをインテグレーションと言いますが、一緒に尊重し合うというような意味でもあります。相互に同意しながら関わっていくことが重要です。「この人はこの人、私は私」とお互いに同意するのです。相手に何かを強く求めているのに説明せず、「わかるでしょ」と言われても「わからない」のです。

二〇五〇年の世界を考える

国連の報告書によると、二〇五〇年に世界人口は九十七億人に達し、二一〇〇年頃には一一〇億人で頭打ちになると予想されています。それに対して、これからの日本は非常に人口が少なくなります。高齢化も進んでいきます。そうしますと必ず外国人労働者が必要になります。

ドイツは既にさまざまな国の労働者を古くから受け入れましたが、それについて、スイスの作

家であるマックス・フリッツシュは「労働力だけが欲しかったのに、人間がついてきた」と表現しています。これは非常に重要な言葉だと思います。当然のことですが労働力がそれだけで来るわけではないのです。宗教、価値観、その他にもいろいろなもの、いろいろな方向性を持っている人間が来るのです。この人達と一緒に、どうやって日本社会を作っていくのかということを考えるということが非常に重要です。

オランダの社会心理学者ヘールト・ホフステードが描いた図には、人間の三つのレベルを根本的などころから、①人類共通の人間性（人間の本性）、次に②文化、そしてその上に③個人の性格が位置付けられて描かれています。この、①人間の本性については生まれついでのものであり、③個人の性格は生まれついでのもので学習とのミックスです。しかし、②文化については学習によって成立するものであるとされています。学習することで作られていくものであるとも言えます。ですから、他文化の人が一緒に居れば、お互いに学習し合い、多様な文化、社会を作ることができるといえると思います。

アフリカのことわざに、「早く行きたければ一人で進め、遠くまで行きたければ皆で進め」という言葉があります。同じような価値観の人だけで意思決定すると、摩擦も少なく、効率的にさつ

さと進むことができます。例えばベンチャー企業は早く進みたいと思っている組織でしょう。多様性よりも迅速な意思決定を重視し、前に進むことを優先するのです。それに対して、みんなと一緒に考えて進んでいくのには時間がかかります。しかし、みんなでやっていけば遠くまで進むことができます。みんなで進めば多様で素晴らしい日本社会が作れると私は思っております。

日本社会は均質なのか？ なぜ日本社会が均質に見えるのか？

日本社会は均質的だと批判されることがあります。

私が学長になった時、いろいろな新聞の取材を受けました。一番大きい記事を書せてくれたのが『ニューヨークタイムズ』です。「あの均質的な日本社会の中で、どうやってアフリカ出身者が学長になったのか」という記事でした。『ニューアフリカン』という雑誌では、『世界で最も影響力があるアフリカ人 百人』の一人に選ばれました。実際には、私は京都の岩倉で毎日普通に通っているだけで、全然影響力なんてありません。しかし、そうやって新聞に取り上げられる位、外から見た日本社会は非常に均質的な珍しい社会であると見られているということなんです。

日本の内側ではそういう認識はないですよね。

日本の組織において役職のポストを持っている外国出身者、あるいは外国人はわずか二パーセントしか居ません。多様化していくためには、そういった日本の組織を変えていくことが重要です。日本はなぜ、今のように均質的な社会に成っているのでしょうか。それは、日本の教育方法に関係があるのではないかと思っています。

私は日本で中学生のサッカー監督を六年間ほどやっていました。よく練習が終わってから親がやって来て「監督さん、練習のパターンを変えて欲しい」と言うことがありました。「え、なんで？」と聞くと、「ミニゲームが多過ぎるから、基礎をやって欲しい」と言うんです。しかも「全員同じ基礎をして欲しい」と言うんですね。私が、「ミニゲームをやって、その子の特徴を見つけてから、そこを成長させたら良いと思いますよ」と言うと、「いや、うちの子だけ目立つのは駄目、うちの子だけが遅れてるのも駄目」と言うんですね。全員同じようにヘディングができればいけない、リフティングができればいけないということなんです。凄くびっくりしました。でも、日本ではそういうものなんです。

国際交流などで日本の小学校に行くと、低学年の小学生は凄く元気なんです。私は勝手に自分

の名前を「ナスビ・タコ」と名付けました。すると、低学年の子たちは「ナスビ先生は何で黒いの」って聞いてくるんです。私もふざけて「テニス焼け」って答えます。そうすると小学生ながら「テニスでここまで日焼けするのかな？」と考える。そこで初めて「もともと違うんじゃないかな」と気付いていくんです。低学年の子は、そうやって遠慮なく聞いてきてくれます。

でも、高学年になるとそういうものは出てきません。言葉を抑えて、自分でタブーにしちゃうんですね。コミュニケーションを取って知れば良いようなものについてもタブーにしてしまうんです。それでは永遠にわかり合えません。相手のことについて知ることもできないし、自分を伝えることも難しいでしょう。私は、日本の教育はテンプレート化・フレーム化教育だと思っています。日本の学校、特に小学校や中学校では「日本人」化するように教育されるんです。

面白いなど思ったのは、集合写真を撮る時に、男性はいつも手がグーなんです。女性は手を重ねて撮ります。これはちょっと変だなと突っ込もうかと思ったら、なぜか私の息子もグーにしちゃってるんです。「これはヤバいな……」と思いました。何気ないこういう経験でも「個人で見ずにワンフレームでしか見ない」ということがわかります。

それなのに、大学で若い人たちを受け入れるときには「個性が大事だ」と言いますよね。でも、

そもそも今まで個性を大事にする教育をしてこなかったんでしよう。いかに個性を殺していくか、日本人化するか、という教育をしてきたわけですよ。ですから、多様性の教育は「大学から」ではなく「小さい頃から」やり始めるべきだろうと私は思っています。

多様性と多文化主義の違い

もう一つ、誤解してはいけないと思うのは「多様性」と「多文化主義」の違いについてです。多様性というのは、人種、性別、宗教、性的指向、社会経済的背景、および民族性など、個人間に存在する違いのことです。多文化主義は、複数の文化的伝統が社会で受け入れられるだけでなく促進される状態を言います。多様性は個人の違いを認めることで、多文化主義はそれを受け入れることです。

多文化主義では文化をパッケージ化してしまうのです。その問題はフランスにもあって、例えばイスラムの人達がヒジャブを付けて小学校に行けないとか、海水浴場でムスリム女性が着るブルキニという水着を着ることができないとか、パブリックな場所では多様性を重んじるんだけど

文化を重んじなかったり、あるいは、文化を重んじるのに宗教を重んじないということがあります。非常に複雑なところですね。

私は、日本社会はまだ間に合うと思っています。このような排除の論理ではなく、どうやってインクルージョン（包摂的）にしていこうかということを考えて欲しいと思っています。排除の論理というのはステイグマです。ステイグマは、他者からどのように見られ、どのようなことを期待されているかという問題を、アイデンティティのレベルで捉えるということです。昔から排除する社会では良くやってきました。ユダヤ教徒やさまざまな人を特定し、その特徴を持つている人を排除するということです。そうではなく、インクルーシブな社会を作っていくということが大事だと思います。

グローバル化とアイデンティティ

グローバル化によって、生まれてから死ぬまで一つの文化・社会の中で過ごすという人生モデルが揺らいでいます。日常的に、暮らしや学び、仕事の中で、本来自国には無い、人・物・仕組

みに触れています。もはや自国の常識だけにすぎることが難しい状況です。そうやって、触れるさまざまなものについて、どのように捉えていくべきなのかということ、実は結構難しいのです。それらは自分たちが元来持っている基準ではそれほど重んじていない可能性があります。

また、軸となるアイデンティティがわからなくなったり、崩れたりしてしまっている人が世界中で増え続けています。現代はまさにアイデンティティ・クライシスの時代です。「日本人」というアイデンティティも例外ではありません。そのアイデンティティは、教育や伝統によって引き継がれてきた意識であって絶対的なものではないのです。

私自身は、マリから日本に来て、常に「あなたはどこ出身なんだ」とかなんだとか言われながら、自分のアイデンティティを再認識してきました。私は日本で生活することで、より自分自身が「マリ化」されたと思っています。グローバル化時代においては、固有の文化的アイデンティティとその表象が私たちの唯一の有効なIDなのです。

ですから、日本人が本場の国際人になるためには、日本文化を再認識して、それを大切にしておくことが重要だと思います。自国の文化をしっかりと見定めた上で、身の回りにある異文化を理解していくことが肝心です。そうでなければ、社会学者のリチャード・セネットが言ったよう

に「自信のなさの裏返しから、排他的になる」というように繋がっていきかねません。日本社会のアイデンティティの基盤が脆弱になれば、返って排他的に成っていく可能性があります。

とは言え、必ずしも、一足飛びに私のように留学する必要はありません。まずは足元の文化に目を凝らしてみてください。そうすれば、実はたくさんさんの異文化がそばにあったことに気が付くはずです。なぜなら、文化というものは核を保ちつつも、常に時代の変化とともに異文化と溶け合って作り上げられてきた結晶だからです。

グローバル化の中であっても、日本は日本、日本人は日本人として、あるいは、自分の地域は自分の地域だとして、その中でどうやってグローバル社会と共生していくのかということが重要なのだと思います。

コミュニケーションの重要性

繰り返して言いますが、グローバル化においてコミュニケーションは非常に重要です。ソクラテスも徹底的に対話を重視しました。相手の事がわからないなら聞けば良いんです。質問したら

良いんです。

学校の研修に講師として呼ばれた時に、「これからムスリムの学生が来るんですが、われわれどうすればいいでしょうか？」みたいなことを聞かれました。そこで私が自分のことを言ったとしても、実際にそこに来るその学生に私のことが通じるかどうかは分かりません。本人に聞けばいいじゃん。聞くことは全然悪い事でもなんでもありませんよ。むしろ、そういったコミュニケーションを取った方が良いと思います。

私とは何者か？

京都精華大学では、数年前から入学の時に「大学入門」という授業で、「自己の認識」と「他者の受け入れ」についてのワークショップをしています。「私とは何者なのか？」ということについて、時には自分を語り、時には他者と話しながら自己を認識していくのです。

大学に入学するまで、自分について考えたことがなかったり、あるいは考えることを許されなかった人が居ます。他人が考えて期待している自分を演じるということが多かったのです。そう

してきた人にとって、自分というのは怖いものです。自分から逃げたいということがあるかもしれません。しかし、自分と向き合うというのは、生きていく上で非常に重要なポイントです。

そして、自分の言葉（ヴォイス）を持つことが大切です。自分の言葉を持つというのは、単純に話せるということではなく、自分の意識、メッセージを言葉に乗せていくということです。

若い人たちは、先生の言葉で喋ったり、親の言葉で喋ったりして、自分の言葉で喋っていないことが良くあります。そうではなく、自分の言葉を持って、自分の意思を持つということが大事です。

グローバル人材（グローバル人間） 世界に向けて開かれた人になる

最後に、グローバル人材、グローバル人間というのは、海外で上手くやれる人ではなく、自分の足元をしっかり見つけられる人だと思っています。「自分とは何者なのか」「自分の文化とは何なのか」、あるいは、自分の宗教、自分の家族、そういう身近なことについてきちんと分かった上で、世界の中で自分の居場所を開拓していくことができる人です。そうでなければ、ただ流されていっ

てしまう一方だと思えます。グローバル化は、われわれが自分自身を認識するためのチャンスを与えてくれます。しかし、その反面、自分がすっかりしていないと流されてしまうことになるでしょう。

私は今の若い人達にこういう言葉を与えております。「自分の変化を怖れるな」という言葉です。常に「問い」を起こしてください。これは仏教の言葉であると思えます。われわれは「問い」を立てる力というのがあまり養われていません。解決策とかソリューションとか、物事には答えがあるかのように育てられるからです。しかし、現実はそうではありません。答えの見えない世の中、不確定な社会的状況で大事なものは、論理的回答だけではなく、そもそも「問い」を立てることが出来る力なのです。行き詰まった時に、ちゃんと「問い」を立てて、原点に立ち戻る事ができるということが重要なのだと思えます。

それでは皆さん、この素晴らしい記念すべきイベントにお招きいただいて本当にありがとうございます。

(二〇二二年六月十六日 ご命日法要)

人間は一本の管、
だが苦悩する管である

杉岡孝紀

(本学文学部 教授)



杉岡 孝紀 (すぎおか たかのり)

- 1965年生まれ、岐阜県出身。
1993年 龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程
真宗学専攻単位取得満期依願退学。
1997年 龍谷大学文学部特定講師。
1999年 同 文学部専任講師。
2004年 同 助教授。
2010年 同 教授。
2015年 農学部へ移籍。
2019年 文学部に再び移籍。専門分野は親鸞教義学。
2016年 博士 (文学/龍谷大学)。
2017年 宗教文化士。

【著作】

- 『親鸞の解釈と方法』(法藏館 '11年)
『真宗他者論 (1) - 実践真宗学の原理としての〈他者〉 -』
(『真宗学』129・130合 '18年)
『浄土教の象徴的行為 - 親鸞の行論を探究する -』(『宗教哲学研究』37 '20年)
『真宗学の〈解釈と方法〉をめぐる課題』
(『近現代『教行信証』研究検証プロジェクト研究紀要』20 '20年)
『親鸞のメタファーと解釈』(『親鸞教学』112 '20年)
『西田哲学と親鸞思想』(一)~(四) (『親鸞と浄土仏教の基礎的研究』
(永田文昌堂 '17年, 『真宗学』135, '17年, 『真宗学』137・138合 '18年, 『真宗学』141・142合 '20年)

ほか多数。

如來の作願をたづぬれば 苦惱の有情をすてずして

回向を首としたまひて 大悲心をば成就せり

〔『正像末和讃』／『浄土真宗聖典—註釈版—』六〇六頁〕

ようこそお参りくださいました。三月終わりか四月の頭頃に今日のご命日法要のお話をいただきました。お受けするかどうか少し悩みましたが、今日は私の父の祥月命日として、父の声聞こえたわけではありませんけれども、ちょっと断るのはまずいだらうと思ってお引き受けさせていただきます。ただいた次第でございます。

その時に、講題だけを先に決めて宗教部さんにご報告をさせていただきました。「人間は一本の管、だが苦悩する管である」という講題です。この講題は、私の体験というか実感からの言葉です。一応大学に努めるものとしては先行研究があるといけないのでネットで調べました。そうすると、やはり既と同じようなことを言っておられる方がいらつしやるんですね。『週刊文春』一九六七年七月十日号に、エッセイストの山口瞳さんの人生相談の中で「人間は所詮一本の管である」という回答をされているようです。現物を見ているわけではありませんけれど、ネットに

はそのように出ておりました。

ご存知のように、この言葉自体は十七世紀のフランスの哲学者、あるいは自然哲学者と言った方が良いかもしれませんが、物理学者でもあり数学者でもあったパスカルが記した『パンセ』に出てくる言葉です。この『パンセ』というのは遺稿集であり、メモ集のようなものです。

人間はひとくきの葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である…われわれの尊厳のすべては、考えることのなかにある…

（前田陽一・由木康訳 『世界の名著 24 パスカル』 中央公論社 五九二頁）

これは有名な言葉ですね。人間は自然の中ではとても弱い存在だけれども、同時に、そのことを自覚して真理を探究し、思考することが出来る偉大な存在でもあるということでしょう。哲学の方では、これが倫理の根源にもなると考えるのだろうと思います。

しかし、最初に申しましたように講題の言葉については私の体験と実感からの言葉です。

体験と実感

私は二十年程持病をもっておりまして、それが悪化しましたので、実は今年三月半ば、卒業式の前から入院をしております。宗教部から依頼がある直前のことでした。

自宅で吐血と下血をしたのです。口から血を吐いて、下からも血が出たんです。厄介な話です。しかし、そういうことは初めてではありませんでしたので、どうすれば良いのかというのは大体わかっておりました。

その時、家族はみんな海外に出ておりました。猫を二匹飼っていますので、血が出た時には「猫のご飯を用意して、トイレを掃除してから入院しないとまずいな」と結構冷静に思いました。すぐに、それらの用意をしたのですが、血の量が多かったので「これは一〇分もたないな」と思いました。「もたない」というのは、意識が無くなるということです。

体が動かなくなるだろうから、一一九番にすぐ電話をして、その間に用事を済ませました。玄関には、いつ入院しても良いように常にキャリアバッグを用意して置いていましたので、その横で、私を心配してくれている猫と一緒に救急車の到着を待ちました。

自宅の近くに救急車・消防車が出るところがありましたので、やはり十分弱くらいで救急車が来ました。ガンガンとドアを叩く音がして、救急隊員の方が入ってきました。その時には私は半分くらい意識が無いような状態でしたが、「杉岡さん、大丈夫ですか？」と聞かれて「大丈夫じゃないから呼んだんです」と答えるくらいの余裕はありました。

救急車に乗るのは、生まれて二回目のことです。乗ったことがある方はご存知かと思いますが、救急車というのはめちゃくちゃ乗り心地が悪いんですよ。そもそも長時間乗るものではありませんからクッションが良くなって体が痛い。私が普段からお世話になっている病院は車で一時間くらいかかります。吐き気がするし、血も出ているので結構気分が悪い。その間に救命士の方がいろいろと聞いてくるんですね。「大丈夫ですか?」「なぜそんな状態になったんですか?」という具合に。病院に着くまでの間に何度か意識が遠くなりかけたのですが、休みなく尋ねられるものですから、頑張ってそれに答えているうちに病院に着きました。

病院で検査をすると、やはりかなり血が出ているということでした。すぐに右手に点滴を二本打ち、出血した箇所を調べるために、口とお尻から管を入れました。輸血も必要な状態でしたので「輸血をするので家族を呼んでサインしてもらってください」と言われるんですが、「家族

は海外です」と言う。「どうしよう、どうしよう」と、おおごとになりました。「もう自分でサインするからとにかくやれることをやってください」と言いましたら、今度は左手に輸血の管をつけられまして、さらに、呼吸もしんどそうだというところで酸素のマスクも付けられました。右手に点滴、左手に輸血、上から下からカメラが入って、酸素マスクですから、もう管だらけです。それから病室に移りました。

夜中になると、今度はトイレに行きたくなってくるんです。人間の身体というのは不思議ですね。何も食べていないのに尿も便も出るんです。看護師さんが「杉岡さん、尿瓶を置いておくので、立ち上がり横になったままでこの中にしてください」って言うんです。でも、横になったままではどこに力を入れれば良いかもわからない。立ち上がれば出来るんですが、立ち上がっちゃいけないと言われているんです。そこで看護師さんがいなくなった時に内緒で立ち上がってすることにしました。そして立ち上がった時、パツと窓を見ました。入院したのは昼だったのですけれど、その時はもう夜でしたから、ガラスが鏡のようになっていました。そこに映った自分の姿を見た時に「ああ、人間は一本の管だ……」と思ったんです。

点滴などの私に繋がれた医療機器が管だということではなく、私自身が管だということをそこ

に見たんです。鏡に映る自分の姿を見た時、「口から何かを入れて、それが便になって出て行く一本の管にすぎない。人間は一本の管だ」という言葉が頭に浮かびました。

宗教部からの依頼が来たのはそれから一週間後くらいのことだったと思います。そんな状態でしたから断ろうかと思いましたが、まあ、六月の御命日の頃にはなんとかなるかなと思って引き受けしたわけです。

しかし、自分で言うのもなんですが、その当時は結構大変でした。コロナの感染時期ですから、たとえ家族であっても病院の中に入ることは出来ません。寂しいですよ。どの病室も一人です。見舞ってくれる人がいなくて、それで減入るといいうこともありますし、当然、自分の体のこともあります。それこそ苦悩する一本の管です。

その「管」というのは所謂「消化管」という管です。調べてみましたら、口から始まって、食道、胃、小腸、大腸を経て肛門で終わる約九メートルの管です。その中でも一番長いのが小腸で、約七メートルもあります。七メートルというと二階建ての家の屋根の頂上くらいです。その管がお腹の中に入っているのです。

ちなみに、私が出血したのは食道の辺りでした。食道付近に瘤が数か所できて、それが破裂し

て出血をしたんですね。血液というのは飲みこむと便通がよくなります。血液が一種の便秘薬となつて出てくるのです。それで、常に吐き気と便意があるような状態が続きました。

脳と腸の相関関係

最近、テレビの宣伝広告なんかで腸内環境という言葉よく聞きますよね、いろんなところで「腸内環境を整えましょう」という広告を目にします。私もヨーグルトをよく飲んだりします。腸というのは単に消化管としての役割だけではなく、どうも最近の研究では免疫とか内分泌とか神経系にも深く関わっていて、私たちの性格とも密接に関連するということが分ってきたようです。腸内環境を整えるというのは、そういうことを含めて整えるということのようです。

日本では、臓器移植を前提とした場合に限ってはありますが、脳死を人の死としています。脳死が人の死であるとされることで死の定義が変わってから、私たちは何となく「人間の中心は脳なんだ」と思っているような気がします。しかし、どうも最近はそのようではないんじゃないかという研究が進んでいるようです。「むしろ腸の方が脳だ」と言ってしまうと言い方がおかしいん

ですけれども、腸こそが第一の臓器であり、脳はその腸によって生まれてきたものではないかという研究があります。

先月、たまたまNHKの「ヒューマニエンスQ」という番組を観ました。織田裕二さんが司会をやっている番組です。この番組では「脳腸相関」ということを言っていました。脳と腸とは相互依存関係にあるということです。我々が言うところの縁起の関係にあるということでしょう。

私たちは、「脳が考えて、それから腸を動かしている」と、脳が親で腸が子どもであるように思っているけれども実はそうではなく、腸が親で脳が子どもなんです。しかもその子供はドラ息子のように言うことを聞かない、脳と腸とはそのような関係なのだそうです。脳は欲のままに動くんですね。だから、脳が指示をして腸を動かすだけではなく、腸が指示をして脳を動かしていることもある。その両面があるんだそうです。面白いなと思います。

また、実感としても日本語の中には心と身体が関係する言葉が沢山ありますよね。腑に落ちないとか、腹が立つとか。昔から日本人はそういうことを良く知っていたのかも知れません。脳と身体には相関の関係があります。ストレスがあると頭痛になるとか、体の調子が悪くなるとか、何か大きなストレスがあるとお腹が痛くなるとかということがありますね。

この話を聞いてから、最近はず学生が「ちょっと調子が悪くて、お腹が痛いんです」とか言っても、「いろいろストレスがあるんやろな」と思うようになりました。前は「それくらいなら……」と思ったりもしていたんですけどね。

腸というのは、どうも自ら考えて脳に指示を与え行動する臓器だというふうに変わってきて。両者の関係は一方的でないことが分かってきたということですよ。

身心が共に悩む

親鸞聖人は私たちの自己中心的なあり方である「煩惱」について、『唯信鈔文意』の中で、

煩は身をわづらはす、悩はこころをなやますといふ

〔唯信鈔文意〕／『浄土真宗聖典―註釈版―』六九八頁

と仰っています。心身が共に悩むんですね。心の悩みと体の悩みが別々にあるわけではなく、共

に悩むのです。親鸞聖人は、『教行信証』信文類後半に、『涅槃經』に説かれる阿闍世の回心物語を引用されています。そこには、阿闍世が父親を殺害して苦惱し、心身共に悩む姿が説かれています。煩惱に催され、体が悩み、心が悩むんです。

でも、そのことに気付く、気付かされるところに、この私を包んでくださっている大いなる慈悲のはたらきがある。その中で、自分自身が苦惱する存在であり、さらに言えば、苦惱できる存在なんだと気付かされていくということです。

管は全ての生き物が持っています。それこそ、蜻飛蠕動*1の類も管ですし、私も管、あなたも管です。しかし、他の生き物と違って、我々人間は苦惱することができます。その苦惱は煩惱に催された苦惱ですから、その苦惱に阿弥陀仏の働きがましますのです。その苦惱が光るんです。管が光るんだと思います。そのことに気付かされる時、管の入り口から言葉が現れてくる。自然と、力みなく、管から南無阿弥陀仏という言葉が出てくるんです。もちろん、痛みや苦しみがある時であつてもお念仏が出ないということはありません。

皆さんの中には、実践真宗学研究科で学ばれている方もいらっしゃると思います。仏教の実践のことを菩薩道と言います。菩薩道にはあるべき姿というのがありますが、病院の中で管につ

ながれていては菩薩道はできません。ただただ、苦悩するだけです。

しかし、そのことをあらかじめ知っておられて呼びかけてくださっている菩薩、大いなる菩薩としての阿弥陀仏、法蔵菩薩のはたらきがあります。そのことを聞いて「南無阿弥陀仏」と感謝申し上げるしかないのだと思います。力みなくお念仏が出るということは、なかなか難しいことだと思います。

苦悩の有情をすてず

如来の作願をたつぬれば 苦悩の有情をすてずして

回向を首としたまひて 大悲心をば成就せり

（『正像末和讃』／『浄土真宗聖典—註釈版—』六〇六頁）

この和讃の「苦悩の有情」というのは、有情の中に「苦悩する有情」と「苦悩しない有情」が二種類あるということではないでしょう。全て、「苦悩する」という有情だということですが、有

情は苦惱するんです。だからこそ、回向を首とされた。「回向を首とする」というのは、この和讃を読むだけでは明確には見えてまいりませんが、お名号を恵み与えられて大悲心を完成されたということですよ。そして、「捨てずして」とあるように、阿弥陀仏は衆生を決して誰ひとり捨てることなく、長い間ご修行してください、その功德を南無阿弥陀仏の中に収められて、大慈悲として誓願を成就してくださいったわけですね。

しかし、病院のベッドで寝ているとなかなかそこまで考えることはできません。なぜなら、ただ痛み、ただ苦しむ、それが私という存在なのです。そうであっても、そこに仏の働きがあるのだということに気付かされる時があります。それには、やはり日々の聴聞が大切なのかなと思わせていただいたことです。

この入院していた期間は、卒業式にも出られず、入学式にも出られず、いろんな方々にご迷惑をかけました。一人の人間が居なくてもこの世の中の事は結構回っていくし、私の代わりはいくらでも居るといえるのは分かっていました。でも、次の世のことは、私こそが阿弥陀仏の救いの目当てであるということを知らねばなりません。退院してみたら、猫も元気にしていて、ちよっと安心しました。

今日は六月十六日で父親の祥月命日だと最初に申し上げました。なかなか得難いご縁を頂戴し、法話らしくない法話かも知れませんが、お念仏を申させていただけ、このようなご縁を頂けたことに感謝したいと思います。本日はどうもありがとうございました。

【※1】蜻飛とは飛びまわる小虫、蠕動とはうごめくうじ虫のこと。

〔『教行信証』行巻 引文／『浄土真宗聖典―註釈版―』一四三頁〕

【文責宗教部】

二〇二二年四月十五日 御速夜法要

「ともに生きる」ということ

内手弘太

(本学文学部 講師)



内手 弘太 (うちで こうた)

1989年生まれ，東京都出身。

2012年 龍谷大学文学部卒業。

2017年 龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程
真宗学専攻単位取得満期依願退学。

2020年4月 龍谷大学文学部講師，現在に至る。

専門分野は真宗学，近代仏教。博士（文学）。

【業績】

「前田慧雲—本願寺派宗学と西洋世界との対峙—」

（碧海寿広・嵩満也・吉永進一編『日本仏教と西洋世界』法蔵館，2020年）

「一九三〇年前後における西本願寺教団の動向とその思想

—布教研究所と「思想問題」—」（『真宗学』第141・142合併号，2020年）

「戦後親鸞論と真宗教学—「信仰と実践」をめぐる議論—」

（『浄土真宗総合研究』第13号，2020年）

「真宗本願寺派の教学と日本主義—梅原真隆を通して—」

（石井公成監修，近藤俊太郎・名和達宣編『近代の仏教思想と日本主義』

（法蔵館，2021年）

「普賢大円の実践論—その形成過程を通して—」

（『真宗学』第143・144合併号，2021年）

「大正初頭における西本願寺教団騒動とその政治・思想的背景」

（『真宗学』第145号，2022年）

「1920年代における刑務教誨と親鸞」

（『世界仏教文化研究論叢』第60輯，2022年）

など。

ただいまご紹介いただきました、文学部の内手と申します。本日は、今年度最初の御速夜法要にあたり、お話しさせていただきます。よろしくお願いいたします。

宗教部の安食課長から、昨年度の二月初頭に「内手先生、四月の御速夜法要お願いします」とハキハキとした声で電話をいただきました。大体、「先生」と呼ばれるようなときは確なことがないわけです。正直、少しだけ「いやだな……」と思いましたが、「講題は卒業式くらいでも良い」ということでしたので、勢いに押されて引き受けてしまいました。しかし、受けてしまった以上、折角の機会でもあります。今、私が考えていることを少し言葉にしてみようと思い、『ともに生きる』ということ》というタイトルを付けました。

先ずは、「何故このタイトルを付けたのか」という理由から話をしていこうと思います。

「ともに生きる」に類する言葉の流行？

私が龍谷大学に着任してから、この四月で二年が経ちました。つまり、コロナ禍の中で着任し、コロナ禍の中で教員として過ごしてきたのです。

着任して早々に、授業・会議はすべてオンラインとなりました。その準備期間としての授業が休講になってしまうと、着任して間がないということと特に仕事があるわけでもありません。また、外に出て行けるわけでもありませんので、時間的には余裕のある生活を送っていました。

今振り返ってみますと、その時間にはテレビの前に座る時間が非常に増えたように思います。何故でしょうか？ もちろん、時間に余裕があったから、ということはあるのですが、テレビに吸い寄せられるというか、どこで、何人の感染者あるいは重傷者が出たのか、感染したらどうなるのか……。不安というよりも常に情報を得ないと落ち着かないような気持ちでテレビの前に座っていたのではないかと思います。

テレビを見ていて感じたのは、「ともに生きる」に類する言葉が、やたらと使われているという事です。その時点では、まだコロナウイルスに対する明確な対処方法が定まっておらず、各国の首脳や代表者たちは、「ともにこの危機を、乗り越えよう」「力を合わせて支え合って乗り越えよう」といったことを強調して国民や世界にメッセージを発信していました。

例えば、グテーレス国連事務総長の演説は以下のようなものでした。

COVID-19に立ち向かうため、すべての力を合わせて連帯することが必要です。(中略)
あらゆる場所のあらゆる人々に、憎悪に対して立ち上がり、敬意を持って互いに接し、やさしさを広げるため、あらゆる機会を使うよう求めます。

※新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に関連したヘイトスピーチに対するグローバル・アピール
国連事務総長ビデオ・メッセージ(ニューヨーク、二〇二〇年五月八日)(https://www.unicef.org/news_press/messages_speeches/sg/37567/) 閲覧二〇二〇年七月十四日)

「すべての力をあわせて連帯しよう」というのは、もちろんコロナ禍でだけ使われていた言葉ではありませんが、ここでは強調して使われているように思われます。

この時期、未知のウイルスが広まっているという不安からか、アジア人に対するヘイトや、他の地域から帰省した人を中傷するような排外的な姿勢があちらこちらで見られました。その裏返しとして、「ともに生きる」や「すべての力をあわせて連帯しよう」というような言葉が使用されてきたのではないかと思います。

「ともに生きる」というのは言葉としてはわかります。しかし、私はこの言葉に違和感を覚え

ました。そして、この「ともに生きる」というような言葉がもつ「魅力」と「危険性」について考えることが、「パンドミックを経験する社会のありようを知るヒントになるのではないだろうか」と、そんなことをほんやりと考えていたのです。

御逮夜法要に適しているのかどうかはわからないのですが、そのようなわけで今日のタイトルを《「ともに生きる」ということ》とさせていただきます。

「ともに生きる」×仏教

さて、この「ともに生きる」という言葉は、仏教と相性の良い言葉といえますか、よく結びつけられているように思います。

二〇一二年に、『ともに生きる仏教』（大谷栄一編、筑摩書房）という本が刊行されていますし、同時期に浄土真宗本願寺派において、御同朋の社会をめざす運動の理念として、「自他共に心豊かに生きることでできる社会の実現に貢献すること……」といったものが打ち出されています。

私は、近代日本の仏教思想について研究していますが、「ともに生きる」に類する言葉は、そ

こでもしばしば登場します。例えば、浄土宗の椎尾弁匠という方は、自らの活動を共生運動と呼んで、社会運動に取り組んでいます。同じく浄土宗の矢吹慶喜という方も連帯共同を主張して社会の問題に向き合っていました。龍谷大学の教授であった梅原真隆も、

「おお兄弟よ」と、すべての人々を敬愛した親鸞こそ、地上において最も大きな絶対価値を認識して、重要な社会観の根底を築いた人である

と、親鸞の生き方として同朋愛を主張し、ともに生きる社会の実現を目指していたと考えられます。

ここからは、私の研究に引きつけられて、この梅原真隆における「同朋愛」に注目して、『ともに生きる』ということ》について考えていくことにします。

同朋愛とその行方

そもそも同朋とは、浄土真宗の宗祖である親鸞聖人が、門弟に当てた手紙の中で、専修念仏に生きるものの平等性・連帯性を表わすために使用した言葉であります。

それがやがて、『歎異抄』の「一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり」などと合わさって解釈されていく中で、念仏者だけでなく、すべての生きとし生けるものが、平等で連帯しているという意味になっていきました。そして現在において、浄土真宗における倫理や社会との向き合い方を考える理念としてしばしば使用されています。

では、梅原のいう「同朋愛」とはどういう姿勢なのか。私は次の二つの文章に象徴的に見られると考えています。

① 「震災遭難記」

怖ろしい流言がつたわって、いづれの駅も物々しい警戒と搜索を試みている。（中略）民衆は極度に激昂してしまっている。それは無理もない。だが、いささか冷静に思考を要する。

そこに深刻な謎がある。ああ、人間は何故に愛し合って生きられないのだ。殺し合い奪い合うことはどうしても地上に許されない罪ではないか。おお、兄弟よ、すべての人は兄弟である。愛し合ってくれ。せめては乏しき愛をあやまり合いながら許し合ってくれ。

〔『親鸞聖人研究』第二七輯、一九三三年十月、二十六頁〕

①は、関東大震災の時の言葉です。都市型地震として、甚大な被害があった震災ですが、その混乱下に朝鮮人が暴動を起こしたとの流言が飛び交い、住民が組織する自警団の手で多数の朝鮮人と中国人が殺害されるという悲劇が起こったことが知られています。

梅原は東京築地で被災し、そうした流言によって惑わされ、激昂する人間の醜い姿を目撃し、非常に動揺したわけです。そして、すべての人間は兄弟であるのだから、「乏しき愛をあやまりながら許しあつてほしい」と、その望みを吐露しています。ここにある「乏しき愛」というのが、後で述べますが、同朋愛を考える上で重要です。

② 「自覚せる罪人の懺悔」

一人の人が罪過を犯したことは社会人のすべてが懺悔すべき社会悪が存するのである、従つて、罪を犯した人のみが懺悔すべきでなくて、罪を犯させた社会人が悉く懺悔すべきであります、(中略)私の希求するところは釈放者に個人悪を自覚せしめ社会人にも社会悪を覚知せしめて、共に悪を負ふものとして水平線に立ち、自覚せる悪人の懺悔のうちに尊い新しい生活を莊嚴せんとするものであります、これは私の親鸞主義の立場における希念であります。

〔「転成会会報」九卷六号、一九二五年六月、十四頁〕

②は、同朋愛の構造が具体的に現われている文章だと思ひます。この文章は、矯正・保護事業についてのもので、犯罪をどのように捉えているかについて興味深いことを言っています。

梅原は、他者が犯した罪は、私を含む社会が犯させたのだ。だから、私を含む社会全体が懺悔する必要がある。そして、ともに悪を背負うものとして、それぞれ自己の罪悪性を懺悔するところに、尊い生活が平等な世界が形成していくのだ、と言うのです。

こうした梅原の考えは、「観念的だ」とか「懺悔だけでは、具体的な社会改善に結びつかない」といった批判を受けるわけですが、そうした批判を受け入れつつも、梅原の言う同朋愛は、宗教

者として社会にいかに向き合うべきかの指標となる考えであると私は思っています。もちろん、ここからどう活動するか、実践するかは問われるべきではありませんが。

そのうえで、ここで考えたいのは、この「同朋／同朋愛」が暴力化した事例があるということです。その一例が、次の文章です。

わが国は八紘為宇の大理想の下、東亜共栄圏の確立と世界新秩序の建設に邁進しつつ（中略）
四海同胞の精神より肇国の理想顕現につとめねばならぬ。

〔皇国宗教としての浄土真宗〕（西本願寺戦時教学指導本部、一九四四年）

良く知られたことですが、戦時下において真宗教団・真宗教学者は積極的に日本の侵略戦争に協力しました。同朋（四海同胞）という言葉も大東亜共栄圏と接合して論じられ、戦争・暴力を肯定するイデオロギーと化していきました。

大正期に同朋愛を積極的に主張していた梅原は、第二次世界大戦時には教団の中核で活動していました。そして、この戦争を「折伏としての聖戦」とし、また折伏についても「折伏とは正し

きものを生かし悪しきものを亡ぼさんとする聖き戦」であると定義しています。

つまり、同朋と同朋でないものを区別し、他者を排除するような考えを主張していったわけ
です。

ではなぜ、同朋という考えは暴力化したのでしょうか——。このことを考えることが、今回
《ともに生きる》ということ》というタイトルをつけた目的です。そのために、もう少し詳しく
梅原の同朋愛を見ていきたいと思えます。

同朋愛の思想基盤

梅原の同朋愛は、彼が見た親鸞の生き方がその根底にあります。では、その親鸞の生き方とは
どういうものだったのでしょうか。梅原は、親鸞の『末法灯明記』の引用の仕方注目しています。

親鸞の名著『教行信証』は、多くの書物の引用で構成されていますが、その一つに、伝最澄の
『末法灯明記』があります。この書物は、末法における仏教者のあり方を示した書です。ここには

「無戒名字の比丘」こそが末法時代の僧侶の正しい姿だと示されています。

末法とは、釈尊の在世から長い時間が経過したために仏教が廃たれ、教えは残っていても、正しく行じる者や証を得る者のいないとする仏教の歴史社会観です。末法の時代には教えのみあつて実践は成り立たちません。そうであるならば、そもそも戒は成り立たないことになるのだから、戒を受けていない名ばかりの僧侶、つまり「無戒名字の比丘」こそが末法の時代における仏教者のあり方であるというのです。そのため、『末法灯明記』においては、末法の世において悟り澄ました顔をしている僧侶たちはおかしい、という批判がされているのです。

戒を持たない僧侶って何なのだろうかと思うわけですが、仏教学者の末木文美士先生は、『日本仏教史』（新潮社、一九九六年）において、それを模索したのが親鸞であつたと書かれています。

親鸞も末法を大いに意識していました。親鸞の著作には各所に末法に関する言葉が出てきます。『教行信証』にはこの『末法灯明記』がほぼ全文引用されています。ただ、なぜか、最後の一段だけが省略されています。この一段に何が書かれているのかといいますと、末法意識がない為政者や南都仏教徒、民衆の虚偽に対する弾劾が説かれています。

梅原はこの一段を親鸞が省略したことに注目し、そこから親鸞の姿を読み込んでいきます。

祖聖（＝親鸞）においては「無戒名字の比丘」は浅間しき現実を省察せる自覚のすすり泣きであり、慚愧の涙に濡れたる悲歎であつたのである。つまり、伝教（＝最澄）にありては傍観的な教界評論であり、祖聖にありては内観的な生活感傷であつた、幻滅と慚愧の底に宗教的自覚をよびさます標語であつたのである。

（「伝教より親鸞へ」、『親鸞聖人研究』第六輯、一九二二年四月、十五頁）

親鸞は「無戒名字の比丘」という僧侶のありようを肯定的に受け取つたのではなく、あくまでも、正法・真実から乖離しているありようであると否定的に捉えている。だからこそ「この『記』によつて余他を裁いたり鞭つたり諷刺したりするこゝろもちがせなかつたから省略した」と梅原は述べてます。つまり、末法という問題に対し、開き直るのではなく、自己の問題として真摯に受けとめ、悩み苦しんだのが親鸞であつたと、梅原は考えたのです。

こうした親鸞の姿から、梅原の同朋愛は、傍観的に他者を批判するのではなく、社会や時代、あるいは他者の問題を自己の問題として引き受け、懺悔するという同朋愛へと展開していくのだと考えられます。

なぜ暴力化したのか？

その同朋愛がなぜ暴力化したのでしょうか——。本題に戻ることにいたします。

実は、この暴力化していくことについては、戦前に梅原自身が懸念していました。同朋愛を論じた論文の一つで、彼は次のような言葉を残しています。

真実と正義が威力を伴はねばならないといふことは、社会が真実について従順でなく正義のまへに勇猛でないことを反証するものである。(中略) 威力の行使は異常な内省と権威ある生命によつて制限されない限りは、何時しか威力の発展につれて誇張を伴ふて暴力に化さんとする。威力がいつしか暴力になるとは地上の悲しい躓きである。けれども、それは屢々地上にくりかへされる躓きである。

〔国民懺悔の運動〕〈『同愛』第十八号、一九二四年〉

ここで重要なことは、真実や正義を主張するということを決して否定しているわけではないと

いうことです。社会が不正義であれば改善していかないといけない、と梅原は言います。ですが、その主張がいつしか誇張して暴力に変化する。それは地上における悲しい躰きであると。さらに、それは度々繰り返されてきたといえます。

では、なぜ暴力化するのか。梅原は、「異常な内省と権威ある生命によって制限されない限りは」と、ここで述べています。非常に大正時代っぽい言葉でわかりにくいですが、ここには先程はなした末法の自覚が大きく関わっていると思います。

末法の自覚とはどのように生じるのか。少し考えてみますと、それは当然、正法との関係性の中で生じるわけです。本来こうであるはずなのにこうなっていない、と。また、末法の自覚は必然的に正法を回想することになる。そうした回想が、再度、末法の自覚を深めていくとも言えるのではないかと。そう考えると、ここでいう権威ある生命とは、正法―末法という歴史観というわけです。つまり、現在の状況を教法から考えるということです。

末法の自覚は自らの罪惡の自覚へと転じ、それが歴史社会の罪惡への共感、他者への共感へと結びつく。その結果、他者と「ともに」罪惡を背負うものとして「生きること」へとつながっていく。ややこねくり回しましたが、先の関東大震災時の「乏しき愛をあやまり合いながら」とい

うのも、ここにつながっていくのだと考えられます。

私は、末法の自覚から派生する「乏しき愛しかない」という自覚こそ、親鸞思想に基づく生き方だと考えています。梅原がいうように、もしこの自覚が失われれば、自分が正しく、あなたが間違っているという考えに簡単に転げ落ち、他者を排除するような暴力を生み出すことになる。それは文字通りの、ただの「悪人」であるといえるのではないか。そう思います。

おわりに

最後に少しまとめておきたいと思います。

近年、反共感論や「共感＋善」という本や論文が多く発表されています。そのなかの一つに、次のようなことが書かれていました。

「共感の押しつけ」の何が問題なのかと言えば、「わかる」と言い切ることによって相手の立場を私の立場に回収してしまう点だ。共感には想像的に他者の視点を取る (perspective

taking) という重要な契機があるため、他者の視点に私が立つという態度から私の視点・立場が、その他の視点・立場だとする態度に陥る危険性がある。

(山崎広光「共感と共同体」、『朝日大学一般教育紀要』三十五号、二〇〇九年、二十六頁)

ここに示されているように、他者に対して「なるほど！わかる！」ということは、それは結局、私の価値観のなかで納得する、理解することである。それは時に、相手の立場を自己の立場に回収してしまう可能性を孕み、他者の他者性を排除してしまう危険性がある。

わかる！わかる！……。私もよく言ってしまう言葉の一つです。

ただ、こうした論文や本は、決して共感そのものを否定したわけではありません。そこで示されているのは、共感の難しさだといえます。

同朋愛に関して述べてきましたが、そこでも共感ということが一つポイントになっていました。重要なことは、やはり「乏しき愛」ということです。同朋は、大東亜共栄圏との接合に見られたように、時として正しいものと正しくないものを峻別して、同質化を迫る危険性がある。ここにあったのは何かというと、自己が正しいと言う考えではないかと思えます。

この共感の危険性も、自己の価値観のなかに、他者の価値観を回収していく。それは、自己の正義を他者に押しつけ、他者の他者性というものを排除していくことだといえます。

私たちは完璧な存在ではない。どこまでも「乏しき愛」しかないんだ。そのなかで生きていく。梅原は次のようにいっています。

私は真実の生活の所有者であると決して表白されない、今それができないばかりでなく一生涯それができないとおもふ、否な真実に生きんとする内生のちからがめざめればめざめるほど私はいよいよ強く虚偽を見出してただ泣ける、(中略)ただ虚偽から真実への苦悩とそれを裏切る生活の懺悔のうちにもがくことが私にとつて最も宗教的な生活をひきしめる、(中略)ただ、真実への過程にわが宗教生活の展開を遂げんとする。

〔現実を視つめて(三)〕、『中外日報』一九一九年七月十七日

こうした生き方は、とてもしんどいことだと思えますが、そうしたなかに、『ともに生きる』ということがあるのではないかと考えるわけです。そして、こうした生き方を示したのが、親

鬱であったといえるのではないかとも思います。

私たちは、今、情報があふれた時代に生きています。また、SNSなどで容易に自分の考えていることを主張できる時代でもあります。そうした時代だからこそ、これは本当に正しいのか、他人を傷つけていないのかと一度考えるといいますか、「自分は完璧ではない」という自覚を持つて立ち止まることが重要ではないかと思えます。

また、この話を受けた後、ロシアのウクライナ侵攻が始まりました。今も終わりが見えない状況が続いています。このことも私が今日何を話そうかと悩んだ理由でもあります。私は国際政治の専門家でもないので、ネットや本を読んで色々と調べるわけですが、昨日「そうなんだ……」と知ったことが、今日にはもう変わっている。そんなことが続いています。また、ネット上では正義を押しつけ合うような暴力が見られている。

私は、あらゆる暴力に反対です。ですから、ロシアの侵攻は許されるべきではないと思います。しかし、そうしたなかでも、様々に発信されている情報については、落ち着いて見極めるというか、受けとめることが必要だと思えます。

梅原の言葉ではないですが、こうした御逮夜法要やご命日法要などを通じて、普段の生活とは異なるもの、価値観と向き合うことを通して、自分を客観視する時間が非常に重要なのではないかと思います。

まとまりのない話となってしまうましたが、以上で終わります。ありがとうございました。

【文責宗教部】

二〇二二年六月二十一日（ご生誕法要）

多様性と多声性..
「ともにいる」ことを考える

山田 容

（本学社会学部 教授）



山田 容 (やまだ よう)

1961年生まれ、広島県出身。

'88年 同志社大学文学部社会福祉学専攻修了。

民間企業、専門学校、短大講師を経て、

'06年より 本学准教授、後に教授。

'20～'22年 社会学部長。

専門分野はソーシャルワーク、児童虐待対応。

【著作】

単著：

「ワークブック社会福祉援助技術演習1 対人援助の基礎」

(ミネルヴァ書房/'03年)

共著：

「社会福祉支援のコミュニケーション」(あいり出版/'13年)

「共生の言語学」(ひつじ出版/'15年)

「〈オトコの育児〉の社会学」(ミネルヴァ書房/'16年)

「現代社会における「福祉」の存在意義を問う－制作と現場をつなぐ取り組み」

(ミネルヴァ書房/'18年)

「子どもの貧困対策における民間支援の重要性」龍谷大学国際社会文化研究所紀要

(22)2020

ほか。

みなさんこんにちは、社会学部の山田です。私は、社会学部現代福祉学科で福祉の実践であるソーシャルワーク、それから子どもの虐待の問題等について考えています。これからしばらくお話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

若い世代の「孤立」

こちらは、十三歳から二十九歳を対象として、「悩み事があっても誰にも相談しない」という人の割合を調べた平成三〇年度の調査データです。日本は十九・九%、韓国は十二・二%、フランス十・八%、そこからイギリス、ドイツ、アメリカ、スウェーデンと下がっていきます。日本は諸外国に比べて、悩みがあったとしても、人に頼れないとか話せない人が多いということがわかります。

今は、どの世代においても孤立が進んでいます。特に若い世代において孤立が進んでいるのかもしれない。孤立し、「自分の思いを聴いてもらえない」状態は、自分の存在証明を失ってしまうということでもあると思います。

「ともにいること」の難しさ

しかしながら、他者と「ともにいる」のはとても難しいことです。他者と「ともにいる」こと
のリスクがメリットを上回るとき、その関係は回避されてしまいます。特に、今の時代は「個性
が大事」とか、「自己責任」、そして「能力主義」など、個を追いつめるような言葉が重なって、
つながりへの抵抗が生まれています。つながりによって「支えられる」メリットよりも、つなが
りがあるからこそ他者から評価され、配慮し合わなければならぬ負荷が大きくなり、「ともに
いる」ことによるリスクを重く感じてしまう人がいるのは無理からぬことだと思えます。

そのため「つながりたいけど、つながれない」という人だけでなく、「つながりたくないから、
つながらない」という人も多くなってきているのかもしれない。そして、つながらないことを
選んだ人たちは一人で生きる術を模索していきます。しかし、それがなかなか見出せず、葛藤し
たり、場合によっては絶望してしまうのではないのでしょうか。

さて、孤立の背景には「自己責任」があると言われますが、ソーシャルワーク専門職のグ

ローバル定義の中では対照的に、「集団的責任 (collective responsibility)」という概念が出てきます。これは「お互いが責任を持ち合う」ということであり、とても大事な考え方だと思います。何か問題があったとしても、その責任を個だけに還元しない社会のあり方を考えていく、このソーシャルワークの定義の発想は、今日のテーマにも有効性がある考え方でしよう。

「一人である」ということ

私は、一人であること自体が悪いとは思いません。学生に問いかけても「一人であることを選びたい」という人たちは少なくありません。選択は自由だし、何より一人でいられるということは大変な力です。しかし、やはり一人で生きていると困りごとは増えます。

福祉の政策動向として、近年、「地域共生」あるいは「伴走型支援」ということが言われています。これらは、「つながり続ける」支援のあり方です。「つながり続ける」と聞くと少し抵抗を感じる人もいるでしょうが、これは「社会とのつながりを絶やさないように支えていこう」ということです。

そして「伴走」とは、「走ることを共にする」わけですが、そもそも走り出せない人も沢山います。そのような状態の人に、「さあ、一緒に走りましょう、つながりましょう」というだけではつながれません。走り出す前の段階として、「一人でいる」ことを大事にしつつ「ともにいる」ことも意味があると考えています。

この「ともにいる」ということについて、今日は「多様性」「多声性」、そして「対話」を手がかりに考えていきたいと思います。

「多様性」と「包摂」と「平等性」

六〇年代以降の国際化や権利意識の高まりの中で、「多様性（ダイバーシティ）」の尊重という考え方が生まれました。現在では、違いを抱える人たちが共に生きるための価値観として「多様性」は定着していると思います。

そこに「包摂（インクルージョン）」という概念が加わり、ダイバーシティ&インクルージョンとセットで言われるようになりました。この考え方によって解放、あるいは解消された抑圧・支

配・差別もありますが、まだまだ多くの課題が残っています。

さらに、九〇年代以降は「平等性（イクエティ）」という概念が加わり、ダイバーシティ、イクエティ&インクルージョンと言われるようになってきています。「ともにいる」ためには、このように常に認識を検証し、更新し、価値を加えていかなければいけないのだと思います。

多様性の諸相を挙げると以下のようにあります。

【インクルージョン】多様な価値が認められて組織に受け入れられている。

【分化・差別化】多様な価値は認められるが、異質なグループとして扱われる。

【除外・排除】多様な価値観が認められず、組織に受け入れられていない。

【同化】多様な価値観が認められず、組織に同化することではじめて受け入れられる。

「多様性」の中にも「関心をもたれる多様性」と「関心を持たれない多様性」があります。これまでにはない存在や価値が登場してきた時、社会のマジヨリテイ（多数派・強い立場の人たち）にとって、興味深い、面白い、あるいは役に立つ、そういう多様性は比較的寛容に認められます。反対

に、その多様性を認めることでマジョリティの側が変化しなければいけない、あるいは認めることで自分が批判されるかもしれないような多様性は排除されてしまうということが起こり得ます。

そして、多様性というカテゴライズ（分類）は、同時に人を分けていくということでもあります。カテゴライズがあまりに単純だと、例えば人種や国籍でひとくくりになれ、さらに「あの国の人はこちらだ」「こういう性的指向の人は」「こういう障がいを持っている人は…」などと、そのカテゴリーの人をみんな同じようにとらえてしまいがちで、その先のちがいをへの想像力が生まれなくなりません。

そして、もう一つ、これは私がとても大事なことだと思っていることです。「カテゴライズされない人」がいます。カテゴライズされないで埋没している個の存在、顧みられない隠された声が身近なところにも沢山あります。それを掘り起こすことが、「多声性」の意義につながっていくように思います。

さらに、インクルージョン（包摂）は美しく響く概念ですが、あえてそこに一つの課題を見つけるとすれば、「包む側」と「包まれる側」という立場、役割を設けてしまうことがあるで

しょう。そこでは、包む側が包まれる側を客体化してしまいます。そこに両者の力の差の構造がないわけではないのです。

ともにいるために違いを同質化していくのか、つまりマイノリティの側・包摂される側に適応を求めていくのか、あるいは違いを認めながら、ともにいる道を探るのか。そこに社会の分岐点があると思います。私たちは、その分岐点に立ち続けていて、どちらに進むのかずっと問われ続けています。昨日も同性婚の結婚の問題について大阪地裁の判決が出ましたが、日々、社会が変わろうとするベクトルと、変わらないベクトルとが拮抗し合うことで生じる葛藤を感じる出来事があります。

ちがいを抱えてともにいる 承認と葛藤

社会学者の奥村隆さんの『他者という技法 コミュニケーションの社会学』（日本評論社）を参考にして少しお話をします。

人は自己の存在証明をするために承認を相互に与え合うべく関係を築くのであり、自分だけで

は自分の存在証明というのはなかなか得られないので、他人からの承認が必要となります。そして、互いに承認し合うという関係性を「承認の体系」ということができます。

しかし、実際には関係の中でどのような評価が他者からなされるかはわかりません。その評価によっては、自分の主体性が奪われてしまうかもしれません。すなわち「承認の体系」である関係は、同時に「葛藤の体系」でもあります。この葛藤を回避するために、私たちが設けている方法が「思いやり」であり「謙虚さ」であると奥田さんは述べられています。ここで言うところの「思いやり」と「謙虚さ」とは、儀礼的、気遣い的なものも含めていると考えていただければ良いと思います。

この「思いやり」と「謙虚さ」の二つを持つことによって「葛藤の体系」を回避し「承認の体系」にしていこうとするわけですが、同時に「思いやり」あるいは「謙虚さ」自体が他者に対する評価基準にもなってしまうのです。つまり、「思いやり」や「謙虚さ」があるかが監視的にチェックされ、ないときは関係から排除されてしまうのです。

さらに、関係の中で自分が褒められたり承認されたりしたとしても、「これは思いやりであり、表面的なものなのではないだろうか」という疑いが出てきます。「承認の体系」のために作られ

ている「思いやり」や「謙虚さ」が、実は「葛藤」を促してしまっている。

そして、こうした葛藤を回避するべく、作られた方策が「陰口」だとのこと。つまり、陰で思いを言う事によって私たちは何かのバランスをとっているのです。「陰口」によって私という主体が他者の客体にならないようにし、主体性を取り戻すのだと奥田さんは述べます。この指摘はとても面白いなと思います。私は奥村さんの論のエッセンスしか申し上げられませんので、関心がある方はぜひ原典をお読みください。

このような関係性について、支援論的な文脈で考えていく場合、また「ともにいること」を考えていく際に、人と人の関係を葛藤ではなく承認の体系にしていくにはどうしたらいいのでしょうか。

ひとつは、人との関わりで、過剰なもしくは儀礼的な「思いやり」を、ある程度は調整していくことです。自分の中に矛盾した感情がある時は、それを素直に伝えていくとか、その時に過剰な言葉を盛らないとか、このような「自己一致」という意識は大事でしょう。

そして、もうひとつ「ぐち」についてですが、まず私は「ぐち」を言うこと自体は悪いことで

はなく、言わないと保てないものがあると思います。私は子供の虐待問題に取り組んでいます、イギリスの専門家が講演で「毎週一回ぐちを言うだけのミーティングをやります」と仰っているのを見て、やはり吐き出すということにはとても意味があるのだなと思いました。

しかし、同時にできればその思いを建設的な展開に持っていけないだろうか、とも考えます。つまり、「ぐち」を「陰口」にしてしまうのではなく、思いを適切に伝え合うこと、それは対話ということにつながっていきます。

近年、支援論の世界で、対話を重視したオープンダイアログという手法が非常に関心を持たれています。

オープンダイアログ 対話主義と「多声性」

この「オープンダイアログ」とは何かというと、フィンランドで開発された精神医療領域の支援方法で、この方法を用いると統合失調症の方の入院期間が短縮されたり、薬物投与量が減少したり、高い再発予防効果があるとされています。オープンダイアログは日本でも取り入れら

れ始めており、昨年の本学の「福祉フォーラム」でも研修会を実施いたしました。

このオープンダイアログでは理論的にはバフチン (Mikhail Mikhailovich Bakhtin) の対話理論の影響を受けており、対話主義を掲げています。当事者の発話、語りがあるだけではなく、それに対していねいに応答し続けていく。応答するということが非常に重要なポイントなのです。

ここで、今日のもう一つのテーマである「多声性」が出てきます。ひとつの真実が語られるとか、ひとつの正しさを決めるのではなく、多くの声が響き合う時間と空間を作るわけです。それを「多声性(ポリフォニー)」と言っています。

実際に、支援の場面ではどう行われているのかというと、例えば統合失調症の患者さんとそのご家族、そして支援チームが五人位でミーティングをします。そこで、当事者の患者さんが「入院したくない」と言い、その理由も説明したとします。それを聞いた支援チームの人たちは「わかりました、では今の話を聞いて私たちだけでミーティングしますね」と言って、その場で支援チームのミーティングを始めるのです。同じ部屋で同じ空間で、「今この患者さんから入院したくないという話がありましたけどみんなどう思いましたか？」ということを支援チームで話すわけです。そこで「切実な思いが伝わってきました」とか「でも、私はここが心配です」と

か「どうしたらこの人にもっと良い条件を作ることが出来るか私たちも考えなきゃいけないと思いました」とか、そういう会話を本人の前でします。

そして、今度はもう一度「私達の話聞いてどうお感じになりましたか？」などと本人に聞きます。そうすると患者さんの側から、「こんなふうに聞いてくれているのか」とか「あそこはちょっと違ったかな」とかそういう声が出てきて、また響き合うわけです。これは、リフレクティングという技法です。

一般に支援ミーティングは支援者だけで行われ、患者さんの側には結論だけを伝える形が多く、話し合われる内容も「どうやって入院を促進するか」などの支援側からみた一つの答えに向かっていく展開が多くみられます。

しかし、当事者と同じ空間で行われるミーティングでは、例えばそこにいる患者さんのお母さんにも一緒に入ってもらって、どう思われたかと聞くということも有りえます。そこにさらなるポリフォニックな空間が生まれます。

オープンダイアログにおいて重要なのは、「結論を急がないこと」です。一つの結論を出すために誰かのモノローグ的（独白的）な解決形成を極力避けて、未解決なままの不確かな状況を

大事にする。それに耐える力（ネガティブ・ケイバビリティ）を持ち、結論を急がないことよって生成されるものがあります。この時間がとても大事な意味をもつようです。私たちは、とにかく早く結論を出すように追い立てられがちですが、対話とともに結論を急がないというところにオープンダイアローグの一つの特徴があります。

対話とは何だろう

では、そもそも対話とは何なのでしょう。オープンダイアローグの開発者の一人であるヤーコ・セイツクラは、

対話実践の本質は、他者の声を無条件に承認することにあります。そうすることで、これまで語らなかつた経験のために、新たな言葉と言語が生み出されます、その経験を取り扱うための言葉と言語が。

（ヤーコ・セイツクラ、トム・アーンキル 『開かれた対話と未来今この瞬間に他者を思いやる』）

と言っています。

対話によって、「その経験を取り扱うための言葉と言語」が生まれる。つまり私たちは最初から言葉と言語を持っているわけではなく、その状況を明確に語るために言葉と言語が作られていく過程、言語が形成・生成されていく過程にこそとても意味があるのだと思います。

また、鷺田清一さんは、

〈対話〉は、〈略〉共通の足場を持たない者のあいだで、たがいにわかりあおうとして試みられる。そのとき、理解しあえるはずだ、という前提に立てば、理解し合えずに終わったとき、「ともにいられる」場所は閉じられる。けれども、理解し合えなくて当たり前だ、という前提に立てば、「ともにいられる」場所は、もう少し開かれる。

〈対話〉は、他人と同じ考え、同じ気持ちになるために試みられるのではない。語り合えば語り合うほど他人と自分の違いがより微細にわかるようになること、それが〈対話〉だ。

（鷺田清一／せんだいメディアアテークHP、芦沢茂喜「ひきこもりでいいみたい」生活書院七頁）

と仰っています。哲学者らしい言い回しですけど、何かとても柔らかくて優しい言葉だなと思います。「わかる」ことを前提にして私たちは話すのではなく、「わからない」ことを確認し合っていていく。そこに価値があると仰っているんだと思います。つまり、違いを踏まえながら共にいるということなのです。

対話のために…多声的であるということ

対話のために多声的であるためには、他者から一方的に自己を定義されないということが大切です。私たちは何か課題を抱え、それが問題としてカテゴリー化される際、他者に自分のことを定義されてしまうこととなります。たとえば「こういう障がいのある人はこうだ」とか「高齢期だからこうだ」と、そして、その定義に基づいてサポートされたり、あるいはカテゴリー化され、分類をされてしまう。

そうではなく、自分を自分で定義していく、このような試みとして「当事者研究」があります。自分で自分のことを研究して言葉にしていくという、支援論的に興味深いアプローチです。これも、一つの正しさに集約されないということですから、多声的な取り組みといえるでしょう。

最初から明確に形成された意思や言語があるのではなくて、それらを作るための〈生〉の言葉が大切にされ、断片的な言葉が飛び交い、そのための時間や関係性が大切にされる。そういう空間を多声性の空間と呼んでも良いのではないかと思います。

そのような空間で、横の関係のポリフォニー（多声性）に大事に応答し続けていくことで、当事者の中で縦のポリフォニーが起こる。それは空間に響いていたいろいろな言葉が取り込まれ、内省され、新たな言葉が紡がれていく過程です。この、横と縦に多声的であるということは、非常に興味深い展開です。

応答性について

次に、対話を形作る応答性についてバフチンの研究者である桑野隆さんは、以下のように述べ

ます。

バフチンのいう〈対話〉は、ことばをもちいて「向かい合って話しあう」ばあいのみをさしているわけではありません。言葉をもちいるか否かに関係なく、ひとが相手に呼びかけ、相手がそれに応答するような関係一般をさしています。

（桑野隆『生きることとしてのダイヤローグ バフチン対話思想のエッセンス』岩波書店 四頁）

言葉がやり取りされる局面だけではなく、組織やつながりの中で、そういう関係性が用意されているということが対話的な空間を作っていく。非常に重要な示唆であると思います。

若者が政治に興味を持たないのも、政治的なものとの対話性が失われてしまっているのではないかと思います。

対話から生成的な相互変容へ

こうした声の響きや様々な応答から私たちには気づき生まれ、見直したり、提案したりなど新たな試みができる可能性が出てきます。組織や社会（側）にいる人が、属する個人に対して一方的に適応を求めるのではなく、自分たちが変化する、あるいは相互に変容していくことを意識した時、生まれてくるのがずっと増えると思います。相手だけを変えるのではなく、「私たちが変わっていくということが大切で、それによって支配的な概念、規範、あるいは仕組みが更新されて、多くの人が生きやすい新たな関係、つながり方が創出されていくと考えます。

私たちの大学もいろいろな変化をしていますけれど、学生にだけ変化を求めるのではなく、教職員、組織も変わっていくということを、もつともつと考えてもいいんじゃないかと思えます。その変化の中で、新たな承認や尊厳を保つ働きが生れてくる。

しかし、こうした変化は非常に手間がかかります。だから、やらないんですね。しかし、手間がかかることは大事なことが多い。手間をかけたところから、ともにいる意義、もしかしたらこれまでにない楽しさも生まれるかもしれない。

先程、宗教部の安食課長と話したんですけど、「いろんな企画をするのは大変ですよね？」と聞くと「でも楽しいですよ」と仰っていました。私は、とても良い言葉を頂いたなと思っています。手間がかかる楽しさ、新しいものが生まれてくる楽しさを感じられるのと、適応だけを求められて行き詰っていくのは、まさに組織の分岐だと思っています。

現実の社会

現実の社会では、多様性や多声性は重視されていないように思えます。むしろ、早く意志を明確にするとか、合理的に判断するとか、効率よく問題解決するというようなことが求められます。こうした能力は現実の社会では非常に評価されます。

皆さん、ファスト動画ってご存知ですか。最近では、三時間とか二時間の映画を早送りにして二十分くらいで見てしまうということがあります。主人公が喋っている以外は全部飛ばし、心理描写とかそういうものはいらない。私は比較的、文化の変化に寛容だと思ってきたんですけど、ファスト動画に関しては、「それはないやろ」って思ってしまうんですよ。それは何か違う

んじゃないかなって、なんか肌感覚での抵抗感があります。要するに、「コスバが悪い」ので、「長い時間見ても結局こうなんでしょ」と「無駄」をどんどん排除していく。ネット社会になってこうした動きが加速度的に起こっているんだと思います。

若い世代は、そうやって「無駄」を排除しながら自主的に生きているようでいて、それと同時に生きる術として「付度」も習得しています。そこに、自主的に生きて自己主張するのか、付度して沈黙するのかというジレンマが生じます。そのジレンマの中で、個性をどう表現していくのか。そういった混乱により、行き詰まってしまう。「個性は重視されているようでいて、実は抑制されている」ということを、学生たちは良く知っています。授業に対する感想の中でも、「先生たちはのびのびと考えなさいと言うけれど、現実の社会ではそんなことはないじゃないですか」と、するどく突きつけられます。

希望を紡げる時期・場に

もう一つ気になるデータとして、内閣府調査の平成二十六年の『子ども・若者白書』において、

「あなたは、自分の将来について明るい希望を持っていますか」という問いに対して、「希望がある」、「どちらかといえば希望がある」と回答した者の合計を国際比較した結果があります。

日本は全年齢において国際的に低いんですけど、十六歳から二十四歳、学齢期あるいは大学で学ぶ期間、就職する期間にはさらに下がっていきます。つまり、学びの場で希望を紡いでいない、むしろ希望が失われていく、というのが現状としてあるわけです。

もちろん、他の国全部と比較できるわけではありませんが、アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・スウェーデン・韓国が八〇%前後であるのに対して、日本は四〇%前後と著しく低い。

つまり、大学にいる時間や大学という場が、希望を紡げる時間や場にはなっていないのだと思います。だからこそ、大学における多様性、あるいは多声性ということを考えていきたいのです。私たちは、学生に多様な存在と出会う機会を作ることができる可能性をもっています。学生がこれから出会う社会では、思いのまま直線的に進んでいけるわけではなく、自分との違いを抱えている人たちと出会うまいと思いません。大学の役割は、そうしたときに有用な思考と協働のパリエーションをどれだけ沢山提供できるかということにあるのだと思います。

大学における多様性と多声性

現実社会の多様性に比べると、普段、大学で接するのは同じような属性の人が多いようにみえるかもしれませんが。しかし、カテゴリーの仕方によっては多様な人たちがいることがわかります。多様な人たちと出会うことによって、単純な答えを疑い、相対化していく学びができるはずです。

そして、参加と承認を重視する考察、検討のプロセスを大学は提供できるはずですが、つまり、付度を学ぶのではなく、協議や対話の経験を学びの中で設定できます。多声的であることが許される可能性がある授業、ゼミ、サークルなどの交流の場を、大学は本来持っているはずですが。

ところが、サークル活動はこの二年間はコロナ禍で本来に深刻な影響を受けましたから、実際こういうことができているのかどうかわかりませんし、授業でも果たしてこうした取り組みを私たち教員ができていのかどうか、問い直さないといけないと思っています。

「結論を急がない学び」を、私たちはもっと重要視しても良いんじゃないかなと思うんです。「これが正解です」ということを学ばせたり提示したりしていくだけではなく、「どう考えたらいい

いんだろう」という問いかけが無数になされていくということが、遠回りのようだけれどもとても大事なことであると思います。

それはつまり、個々の問いを「私たちの問い」という共同主体的なものにしていくということです。学生たちには日々、押し付けられる問いが沢山あります。「あなたは何をするの」「あなたはどうするの」「あなたはそろそろ就活の時期だけどどうするの」、というような「あなた」への問いが無数に投げかけられます。

私たちが日々色んなことを問いかけられますが、それを「あなた」ではなく「私たちの」問いにしてもらえた時、すごく楽になります。私も事務職員の方が、「私たちの問い」として一緒に考えてくださると、本当にすごく楽に仕事ができます。そのような関係は、楽しいといいますが、そこに仕事のやりがいを感じたりすることがあります。一人に押しつけられるのではなく、その場に参加ができるということでしょう。

そして、それは組織運営でも同じです。多様な人達が語られる場、それが聞かれ応答されること、そういった集積が生成的变化へとつながる時に、私たちは「主体性」を取り戻し、また次につながるっていくような様々な「動機」を形成することができます。さきほど紹介したデータにお

いては非常に低かった「希望」を形成するためにも、こういう場が本当に大事なんじゃないかと思えます。

多声的な場を想起させる環境作り

キャンパスには、宗教部による多様性を大事にするイベントのお知らせの看板が出ています。私は、もともとと大学には立て看板などを出していても良いと思います。そうすれば、たとえばイベントに参加しなくても「あ、大学はこんなことを大事にしているんだ」というメッセージが学生にも伝わります。

ところで、この瀬田キャンパスには日除けのパラソルのついた机と椅子が置かれていますよね。いつ置かれたのかわかりませんが、凄く良いなと思っています。時々、そこで学生とアイスクリームを食べたりするんですけど、パラソルと椅子が、「ここはそういう場だよ」ということを伝えています。最近ではSTEAMロボコンズもできました。たとえば使わなくても「私たちはこういうことを大事にしているんだよ」ということをメッセージとして出していくことができます。

もちろん「就活フェアのお知らせ」といった情報も大事なんですけれど、「すぐに答えが出るわけじゃないけど、みんなで考えましょう」といった発信もしていくべきでしょう。シンポジウムの見出しだけでも刺激になります。このようなキャンパスの環境を大事にできればと思います。

主体性を実感できる場に

上野千鶴子さんと中西正司さんが「当事者主権」についての話をされています。

当事者主権とは、あなたがたのいう普遍は、私ひとりがあるにあってはまらないことで挫折する、と宣言できる権利のことである。制度設計の基準を、平均にではなく「最後のひとり」に合わせる。そのためには多数決を絶対視しない。

（中西正司 上野千鶴子 『当事者主義』岩波新書 二十二頁）

これは大事なことだと思います。

多数決が正しいと散々言われてきている人たちにとって、多数決をしない物事の決め方、あるいは取り組み方というのは難しいのだろうなと思います。しかし、多様性と多声性が守られる場では、多数決ではなく、大事な決め方もっと別にあるということが、人と安心してつながり、「ともにいる」基盤になるのだと思います。

おわりに

最後になりますが、こういった企画をされてきた宗教部のみなさん、また学生支援をされている部署のみなさん、各種の相談室も含めて、学内で多様性を踏まえた多声的な機会、場を作ってくださったみなさんに敬意と感謝を表したいと思います。

そして、支えている人たちのための支えは、実はすごく大事なことです。そこも大学として考えて欲しいなと思っています。

私はいつも瀬田キャンパス六号館にある障がい学生支援室の前を通るとき、チラっと中を覗い

ていくんですけど、すごく和らいだ賑わいがあったとても良いなと感じています。集う人たちがすごくリラックスした表情でお話をしたりされています。それもポリフォニーであるわけですね。多様性、多声性が飛び交って、結論が出されようとはしない雰囲気を感じます。

そして、同時にそこにポリリズムがあるとも感じます。大阪大学の村上靖彦さんが仰っていますが（『交わらないリズム 出会いとすれ違いの現象学』青土社）いろんなリズムが同時に流れていて、決められた一つのペースでは進まない。その人の身体のリズムもあれば、社会参加のリズムもあるし、思考のリズムもあります。それらが同時にいることが許される場、つまり、ポリフォニーでありポリリズムである場が大学の中にもっとも増えれば良いなと思っています。そういった場所が大学の生成的な変容の起点になれば良いなと思います。

私たちが変わること、もっといろいろな人が大学という場で、将来につながる途を見つけられることができばいいなと思っています。

では、私のお話はここまでとさせていただきます。どうもありがとうございました。

【文責宗教部】

(二〇二二年五月十六日 ご命日法要)

仰げば尊し

井上見淳

(本学社会学部 准教授)



井上 見淳 (いのうえ けんじゅん)

1976年生まれ、福岡県出身。

'99年 龍谷大学文学部真宗学科卒業。

'04年 同大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期依願退学。

同年、本願寺教学伝道研究センター常勤研究員。宗学院入学。

龍谷大学非常勤講師。

'11年 龍谷大学専任講師。

'16年より准教授。

'17年より社会学部。

専門は真宗学。

【著作】

『『歎異抄』に問う－その思想と展開』（'07年、編著、永田文昌堂）

『月々の言葉』（'07年、編著、本願寺出版社）

『心にひびく言葉』（'16年、単著、本願寺出版社）

『（勤学寮）親鸞聖人の教え』（'17年、編著、本願寺出版社）

『親鸞教義の諸問題』（'17年、編著、永田文昌堂）

『日々の暮らしと、歎異抄』（'21年、単著、本願寺出版社）

『いつでも歎異抄』（'21年、監修・共著、本願寺出版社）

『真宗悪人伝』（'21年、単著、法藏館）

『「たすけたまへ」の浄土教－三業婦命説の源泉と展開－』

（'22年、単著、法藏館）

著書、論文ほか多数。

弥陀の名号となへつつ 信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもひあり

〔浄土和讃〕冠頭讃／『浄土真宗聖典―註釈版―』五五五頁

皆様こんにちは。本日は親鸞聖人のご命日の法要です。このたび、宗教部の安食課長から「ご命日法要に内藤知康先生のお話をされませんか」というお話をいただきました。内藤先生は私の恩師です。私としても、こういう機会はなかなか無いことだなと思いましたのでお引き受けいたしました。ですから今回はそのテーマでお話させていただきます。

ご往生の知らせ

内藤先生は、本年の二月二十八日に七十六歳でご往生されました。

その日、私は妻と昼ご飯に回転寿司のお店に行っておりました。平日だというのに随分と混んでいましたね、順番待ちをしていたんです。そうしたら、携帯電話に内藤先生からLINEの連

絡が入ってきました。私は、「またなにかやらかしたかな、いや仕事の依頼やろうか」などと思つて、恐る恐る開けてみますと、それは内藤先生からではなく、先生の奥さまが内藤先生の携帯から連絡してきてくださったものでした。この今までになかった普通ではない状況に、急に心拍数が上がったのですが、内容としては「実は今朝、主人が雪の境内で転倒して頭を打ってしまったようで……」と。他にも色々書いてありましたけれども、要するにもう手の施しようがない状態になっているんだということでした。

私はそれを見た瞬間にバツと立ち上がって、「えーちょっと待って、待って。」と言って外に出て行つたんだそうです。「だそうです」と言うのは、その時の記憶があまりないからです。妻は、私の様子を見て異変を感じたんでしょう、慌てて追いかけてきました。そこから奥さまやいろいろな方々と連絡を取り、自分も急いで新幹線に飛び乗って、先生のご自坊がある福井県に向かいました。

とはいえ、なにせ私は福岡県の人間です。福井県は遠い。その新幹線の道中で「先生がご往生された」という知らせが入りました。私は「ああ、間に合わなかった……」と思ひ、新幹線で座ったまま涙が溢れ、窓の外を向いたまましばらく泣きました。

本当に、普通の日常だったはずの時間に、とんでもないニュースが飛び込んできました……。最期に内藤先生が私に、いつ誰が、どんな理由でこの世界を去って行くのかわからないという「生死無常の理」を身をもって教えてくださったのだと思います。しかし、本当に突然のことで、びっくりしたことであります。

内藤先生との出会い

私が内藤先生と初めて出あってから、二十五年の月日が経っております。それまで出あってからの年月を数えたことさえありませんでしたが。その二十五年間を辿って思い出されるのは、私がこの龍谷大学で一年生、二年生の時に「真宗学」を学ぶのに苦勞していた時のことです。私はお寺の長男として生まれ育ちました。しかし、「寺の跡は継ぎたくない」と散々言っておりましたので、大学受験をめぐっては、父と何度か激突しました。父は普段は優しい人ですが、あの時だけは本当に強硬で、対する私にもいろいろな思いがありましたから、結論が出るまでは簡単なことではありませんでした。結局、私が思い直して、それなりに決意もして、龍谷大学に

入らせてもらいました。そこで、親鸞聖人の教えを学ばせてもらうことになったんですが、これがなかなか難しかったですね。

高校までに培ってきた思考法とか勉強法は、この「真宗学」という分野を学ぶとき、どう用いればいいのか、よくわかりませんでした。それに加えて、私は不勉強なくせに生意気で、しかも不真面目な所がありますから、いろいろと考えて余計にこじらせていたのかもしれない。

とにかく授業を聞いても阿弥陀如来とかお浄土とか、どうやって受け止めたらよいのか、ずっと胸の中でモヤモヤし続けていました。そして先生方の説明はなんとなく理解はできるので、ピンとこない。退屈に感じてしまう。説明にも矛盾や曖昧さばかり感じて、結局、よくわからない。質問に行きましても、先生方の説明があまりにも丁寧だと私の好奇心の炎はシューッと途中で消えてしまいましたし、専門用語の質問にいつても、さらに専門用語をまじえられて説明されて「余計分からん！」と混乱したりしていました。

そんなわけでモヤモヤし続け、私は「大学を卒業したら、友達もあつちにたくさんいるし、すぐ実家に帰ろう」と思っていました。すると、やる気があるのかなのかよくわからない、そんな私を見かねた父が、二年生の最後の頃、「お前、何がしたいんや？どんなことを学びたいんや」

と聞いてきたものですから、私が「自分はこういうことを学びたい」と言ったら「それなら内藤知康先生が良いんじゃないか」と勧めてくれたんですね。

「僕は、その先生、一回も習ったことないよ」と言ったんですが、父が「大丈夫。僕は内藤先生を知っているけど、優しい先生よ」と言いますもので、それなら最後の「賭け」ではないですけども、このままでも仕方がないので、「よし行ってみるか」と、第一希望を内藤ゼミにしてゼミ希望票を出したのでした。

その後、無事に内藤ゼミに入れた三年生の春。その第一回目のゼミは、大宮学舎北齋のゼミ教室でした。ガチャッとドアを開けて入ってこられた先生は、当時は結構体が大きくてですね。少し色のかかった度の強いメガネを掛けておられました。そして、かたい表情で入ってこられ、私たちを一瞬見わたすと、すつと黙って座られ、しずかに出席をとられ始めました。そのクールなすがたを見て、私は心の中で、父に「本当にこの先生、優しいんやろうな！」と思いましたよ。しかしそこから、長く付き合わせていただくことになると、すぐにあれは先生の、いわば「てれ」だったんだとわかるのですが、同期のゼミ生たちと「あの時は驚いたよな」と、後で話題にあがった時はいつも笑ったことでした。

内藤ゼミに見つけた「居場所」

その内藤ゼミに入れたということが、私の中では非常に大きな転機となりました。

私が感じた疑問を、内藤先生は本当にいつも正面から受け止めてくださり、ごまかすことなく的確に答えてくださいました。専門用語は語義を簡潔に定義され、とかく「真宗学」というのは感情に流されがちな議論になりやすい分野ですが、いつも根拠と論理とを大切にして意見をいうように厳しく指導されました。

先生は「真宗学で使われる言葉とか考え方というのは、必ずお聖教に根拠がある。だからその根拠になる場所をちゃんと探してから話さんとあかん」と教えてくださいました。例えば、私がゼミの授業中に「信心正因」という言葉について発言した時に、先生はまず私に「今、井上君は、信心正因って言うけれど、信心正因ってどこに書いてあるの？」と言われました。私は反射的に間違ったことを言ったかと思いましたが、「え？ 信心正因は違うんですか？」と聞き直したら「いや、違うとは言っていない（笑）。どこに書いてあるのか、と聞いてるんやけど」と言われました。私が「いや…、それは、知りません…」と答えますと、先生は少し笑われて、そこから「例

えば、ここに書いてあるやろ。ここにもやはりこう書いてある。でも、ここにはこういう風に書いてあるんや」と、当時使っていた『真宗聖教全書』を自由自在にめくっては「ここにはこう」「ここはこういう文脈でこう言われている」と親鸞聖人のいろんな言い方を教えてくださいました。

そして、私がある日、思い切って「阿弥陀仏とか浄土とかについて、どう受け止めていけばよいでしょうか」と先生に遠慮なく質問した時がありました。そのときのこと鮮明に覚えております。

そのとき先生は、話を聞きながら「ああ」と少し頷いた後に、

「お浄土は有るんだらうか無いんだらうか、阿弥陀仏は居るんだらうか居ないんだらうか。そういう疑問はよくわかる。しかし、今はね。その思いは少し横に置いておきなさい。そして今はね、親鸞聖人が何を言おうとされているのか、お聖教の親鸞聖人の言葉を正確に理解することをまずは優先しなさい」

と答えてくださいました。そう伺った私は、「そうか。先生がいうならそうなんやろうな。とにかく今はまずこのお聖教を確認するべきなんだな」と思い、言われるとおり、モヤモヤとしていた自分の受け止めに關してはちよつと置いておこうということで、私がやるべきことの方性は、

あの時にひとまず定まったのだと思います。

そしてそれから数年たったとき、大切な方々とのいくつもの別れ、ご法話のお聴聞、いろんな人生経験を重ねる中で、いつの間にか、ふしぎなほど、お浄土や阿弥陀さまを受け入れて自分があることに気づきました。内藤先生は、あの時、直接はそうおっしゃりませんでした。そういう受け止めは、論理を理解すればすぐに解決するというのともまた違う。理屈を超えている程度、人生経験やご法義を聞いていく中で、いつの間にか、心の中に受け止めていけるようになっていくものだと思えられたんだと今、私は思っています。

思い返せば、内藤先生には本当にいろんなことを質問させてもらい、数えきれないご教授をいただきました。内藤先生だけが、私の質問を時に「ほお、おもしろいやないか」と言ってくださった唯一の先生でした。私にとっては、内藤先生の学問に対する姿勢は、自分の目指すべきあり方として、それからいつも意識しつづけるものとなっていったのでした。

こうして内藤ゼミで過ごす中で、私は「自分のような発想をしてもよかつたんだ」と思えるようになり、はじめて「真宗学」という学問の世界に、自分の居場所が見つかった気がします。非常にありがたいことでした。

お聖教の根拠を大切にしなさい

この「お聖教の根拠を大切にしなさい」というのは、本当に厳しく指導されましたね。

例えば私が「親鸞聖人のお書物にはこういう言い方がありますが……」と質問をしたとしても、内藤先生は「確かにそういう言い方はあるけれども、今君が言ったような言い方とはちよつと意味が違ふと思う。あれはこういう場面の、こういう文脈でおっしゃったんであって、親鸞聖人がおっしゃりたいのは全体から言えばこういう意味だと思う」などと、言葉だけではなく、文脈をよくみなさいと指導されました。

あるいは、親鸞聖人の言葉で有名な

まことに知んぬ、悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の
数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥づべし傷むべしと。

〔顕浄土真実教行証文類〕／〔浄土真宗聖典―註釈版―〕二六六頁

という言葉がありますが、この中の「愛欲」という言葉について、ある本に「親鸞は、自らの性欲についても赤裸々に告白しており…」と書いてありました。私はそれを読んで、内藤先生に「あそここの愛欲って、あれ性欲のことなんですよ」と聞きました。すると、先生が「性欲も含むとは思いますが、性欲だけじゃない。貪愛といって…」とずっと説明してくださいました。それを聞いて、当時若かった私は「そうなんです。性欲だったら分かり易かったですけど」と口走ったそのとき、即座に内藤先生が「君が分かりやすいからそう理解しようという姿勢は、お聖教の読み方としては、ええ読み方ではないで」とおっしゃったのでした。

「分かりやすさ」というのはとても大切なことです。しかし、自分が分かりやすく理解するためにお聖教の言葉を変形させてはいけません。お聖教の言葉を理解する時は慎重でありなさい。ということをおの時に教わったと思います。

思い返すと先生は、ゼミで毎週、『真宗聖教全書』をめくりにくくって、いろんな親鸞聖人の言葉を紹介してくださいました。今つくづく思いますけれども、私はあの時あの場所で、内藤先生に、親鸞聖人に引き合わせていただいたんだと心から思っております。あの時がなかったら、今の自分はようになっていたんやろうかと思うと、想像するだけで恐ろしいですね。

一、二年生のときに本当に迷走して、どうしたら良いんだろうかと思っていたあの日々も、今となつては、僧侶として必要な迷いだつたと思つています。あの時私が感じていた疑問の数々は、一般の人が仏教、真宗を理解する時に、よく感じている疑問なんだとわかつたからです。だから私は授業でも法話でも教えについて話す時には、かつて自分がどうだつたかよく振り返ります。そしてあの日々をそうやって必要だつたと受け止められるようになったのは、あの時に内藤先生と出遇わせていただき、学べた日々があつたからなのです。

内藤先生の研究姿勢

内藤先生の研究者としての姿勢について私なりにシンプルに表現させてもらいますと、親鸞聖人のお書物全体を見渡し、その言葉を正確に理解して、論理的に思考するというものです。言うだけなら簡単ですけどもね。

親鸞聖人の書物全体を見渡すという点では、内藤先生は言うまでもなく、親鸞聖人の書物をくまなくご覧になっておられました。その上で驚かされたのは、そのすさまじい記憶力でした。

先生に接したことがある方はご存知かと思いますが、先生の趣味は非常に広くて、クラシック音楽、他分野にわたる読書、囲碁、バドミントン、そして阪神タイガースと、本当にいろいろありました。どこの分野においてもこまかい所まで記憶がすごかったですね。

例えば、ある時、内藤先生と、ある先生、そして私ともう一人の門下生で夜ご飯を頂いているとき、ある先生が「内藤先生、最近、私は手塚治虫のマンガに改めてはまってるんですよ。浦沢直樹という漫画家が、鉄腕アトム『地上最大のロボット』をリメイクしてまして」という話題になったとき、内藤先生が「ああ、『地上最大のロボット』！ 懐かしいな。あれは確か、最後エプシロンやったな。太陽光でな……」と、そこから作中に登場するロボットの固有名詞をすらすら出しながら楽しそうに話されるんです。私、横でその会話を聞いていましてびっくりしましてね、「先生、最近読んだわけじゃないですよね？」って言ったら「いや、だからもう何十年も前や」と。そしてある先生が、他の手塚作品について話をふっても、どれもすごい記憶力でストーリーから登場人物まで、とてもよく覚えておられました。それくらい優れた記憶力で、お聖教を読んでもおられたということです。

また、正確に理解するという意味では、内藤先生は漢文の文法も、古文の文法も、相当にお詳

しかったですね。私は漢文のお聖教を内藤先生ほど流暢に読む先生を他に知りません。「本当にこんなスピードで漢文を読めるものなのか」と思うくらい、流暢で淀みなく、もうほぼ朗読の域に達しておられました。こっちは漢文を目で追うだけでも、置いていかれてましたから（笑）

そして私が論文を書き始めた頃に、内藤先生に言われたのは、

「親鸞聖人のお書物を読んでいたら、これはこうなんじゃないだろうか、と思うようになってくる。それが論文の種になるんやな。しかし、こうなんじゃないだろうかと思った時、そこから君が一生懸命探さないといけないのは、親鸞聖人がそれとは違う言い方をしている箇所や。自分が思いついた時には、そのことを冷静に考えていきなさい。一番いけないのは、親鸞思想を論じると言いながら、自分にとって都合の良いところだけをくつつけて、これが親鸞思想だと言うことや。自分に都合の悪いことは等閑視しておいて、それで親鸞思想を論じたことにはならない。そこについてはよく気をつけなさい」ということでした。

また、内藤先生は「学問に付度はいらぬ」ともおっしゃっておられました。「学問というのには批判によってこそ進歩発展していく。それによってこそ真実義が見えてくるんであって、付度

は学問上ではありえない」とおっしゃっておられました。

ですから、学会での先生の批判は非常に厳しかったですね。初対面の研究者であっても、ゼミ生に対してであっても、学問上のこととなれば、容赦なかったところがあります。内藤先生はそういう時、直裁にものを申されますから、その厳しさゆえに、時には「内藤先生は一体どういう人なのか？」という批判的な声を聞くことも、正直ありました。しかし、それは親鸞聖人あるいは阿弥陀如来さまの真実義を、そうやって發揮してこそその真宗学なんだという、研究者として、また僧侶としての先生の心念があったからなんです。

「報恩」と「恩返し」の違い

さて浄土真宗でよく使う言葉に「報恩」という言葉があります。報恩というのは「恩に報いる」と書きます。学生に「恩に報いる」というのはどういう意味やと思う？」と聞くと、大抵の学生は「恩返しみたいなことですか？」とよく答えます。しかし、浄土真宗では報恩と恩返しとは分けて考えますね。私たちが「恩返し」と聞いてはっと思い浮かぶのは、たとえば昔話の「鶴の恩返

し」ですね。受けたご恩を少しずつ返していこうという発想のお話ですが、確かに真宗でいう報恩というのはそれとは違うように思います。

私は昔、本願寺の堀川通りの向かい側、今の龍谷ミュージアムのある場所にあった、本願寺の研究所に勤めておりました。私が研究員をしていた時にある先生が講義をしてくださっている中で、「報恩」ということに触れて「報恩ということについて、最近は『ありがとうのお念仏』とかいうて、簡単に言ってるけれど、あれは本当やろうか」とおっしゃっていました。そして、その先生は、こんなたとえで「報恩」を説明されました。

「ここから京都駅に行くとなれば、まず堀川通りに出るけれど、そこから京都駅への行き方が分からなくなったとする。どっちへ行ったら良いかが分からずに右往左往する。これが迷っているという状態ですよ。すると、ちょうどそこに道を知っている人が現れて、『京都駅に行くならこっちに行きなさい』と南側を指さして、『そして、信号を二つ越えたところを、左に行きなさい。そしたら右手側に京都駅が見えてきますよ』と教えてくださったとする。では、そうやって教えられた人が、教えてくださった方の恩に報いる道はなんですか。それは教えてくださった方の言うとおりに歩き始めることでしょうか。そこに止まったまま『ありがとうございます。ありがとう

「ございます」と言い続けるよりもね、南に行けと言われたら、まず南に歩き始める。それが根本的な何よりの報恩です。」

とおっしゃっていました。なるほどと思わせていただいたことでした。

そう考えた時に報恩というのは、その恩人が私に一体何を願ったのだろうか、私に何を教えてくださっただろうか、そのことを尋ねるところから生まれてくるわけです。逆に言えば、そのことを尋ねる心がないところには報恩というのは生まれてこない。阿弥陀さまは私に、生きがたいこの人生を歩むのに、お念仏をしながら歩みなさい。そして死ぬときは滅びるのではなく、浄土に生まれると受け止めなさいと教えられました。そこに念仏する者の報恩の道があるわけです。

そして内藤先生に話を戻しますと、私はこれまで語ってきた通り、内藤先生から色んな学恩を被ってきました。今、龍谷大学に奉職している身として私がなすべき報恩の道は、私が内藤先生から教わった学問的な方法や、考え方をより多くの方に伝えていくことであろうと思っております。

恩師内藤知康先生へ

かつて内藤先生が長年の研究成果を『親鸞の往生思想』（二〇一八年、法藏館）という大著としてまとめられ、それにより博士号を取得された際、門下生たちと祝賀会をおこなったことがありました。今回の「仰げば尊し」というタイトルは、その時、最後に全員で壇上の内藤先生に向けて、この曲を歌ったことがあり、いつもクールな内藤先生が珍しく感慨深いお顔をされておられました。そのときを思い出して付けさせていただきました。

内藤先生の身近にいた方はよくご存じかと思いますが、ことあるごとに先生は「恩師村上速水先生が」と言われていました。恩師と必ず付けておられましたし、話を聞いていけば、いかに内藤先生が村上先生を大切にされていたかということとは十分すぎるほどに伝わって参りました。

ですから、私は今まで、なんとなく気が引けて、この言葉を口に出して言うことはありませんでしたが、今この場を借りまして、改めまして恩師内藤知康先生と呼ばせていただき、恩師の学恩に改めて感謝申し上げたいと思います。

先生からたまわった学恩を、これからまた私が研究者として、教育者として、僧侶として一生懸命發揮していくことが先生のご恩に報いていく道だと受け止めております。

今日のご命日法要では内藤先生のことを少しお話しさせていただきました。これでご法話とさせていただきます

【文責宗教部】

まずは、本書の刊行にあたり、快くご協力いただきました先生方に深く感謝し御礼申し上げます。

今年は、長引くコロナ禍・世界各地での戦争・世界経済の乱れなど、先行きの見えない不安な状況が続いた一年でした。そんな中でも、法要のたびに先生方から聞かせていただくお話は、仏さまの願いの有り難さや、人とのつながりを感じさせてくださるような温かいお話でした。

この冊子を通して、読者のみなさまが師弟・家族・友人・仲間、また仏さまとの様々なつながりを感じ、不安の中にも「ともに生きる」ということに思いをはせていただけますならば、望外のよろこびであります。末筆ではございますが、今年二月にご往生された龍谷大学名誉教授・元宗教部部长内藤知康勸学和上の学恩を偲び、宗教部一同、謹んで哀悼の意を表します。

(宗教部)

ともに生きる

「りゅうこくブックス」 No. 136

二〇二二年十月十八日 発行

編輯 龍谷大学宗教部

発行 龍谷大学宗教部
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

「限りない愚かさ」 武田 晋

「これからの世界」を生きる皆さんが
持続社会とダイバーシティにどう取り組むか ウスビ・サコ

人間は一本の管、
だが苦悩する管である 杉岡孝紀

「ともに生きる」ということ 内手弘太

多様性と多声性：
「ともにいる」ことを考える 山田 容

仰げば尊し 井上見淳

